

Oracle® Applications

メンテナンス・ユーティリティ

リリース 12

部品番号 : E05655-01

2007 年 9 月

Oracle Applications メンテナンス・ユーティリティ, リリース 12

部品番号 : E05655-01

原本名 : Oracle Applications Maintenance Utilities, Release 12

原本部品番号 : B31568-01

原著者 : Carole Eubanks

原本協力者 : Yun Shaw, Joycelyn Wee, Henriette Fux, Richard Lotero

Copyright © 2000, 2007, Oracle. All rights reserved.

制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記載された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle USA, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかるとして使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一かかるとしてプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle、JD Edwards、PeopleSoft、Siebel は米国 Oracle Corporation およびその子会社、関連会社の登録商標です。その他の名称は、他社の商標の可能性がります。

このプログラムは、第三者の Web サイトへリンクし、第三者のコンテンツ、製品、サービスへアクセスすることがあります。オラクル社およびその関連会社は第三者の Web サイトで提供されるコンテンツについては、一切の責任を負いかねます。当該コンテンツの利用は、お客様の責任になります。第三者の製品またはサービスを購入する場合は、第三者と直接の取引となります。オラクル社およびその関連会社は、第三者の製品およびサービスの品質、契約の履行（製品またはサービスの提供、保証義務を含む）に関しては責任を負いかねます。また、第三者との取引により損失や損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

目次

はじめに	v
対象読者	vi
ドキュメントのアクセシビリティについて	vi
関連ドキュメント	vi
表記上の規則	vii
サポートおよびサービス	vii
1 スタート・ガイド	
Oracle Applications メンテナンス・ユーティリティ	1-2
コマンドライン・ユーティリティ	1-2
Web ベース・ユーティリティ	1-3
オンライン・ヘルプ	1-4
AD コマンドライン・ユーティリティ	1-6
共通の AD 操作	1-6
AD のインタフェース	1-10
コマンドライン引数	1-10
AD ユーティリティの実行	1-15
パラレル処理の使用	1-18
タスクのパラレル処理	1-18
パラレル処理のモニタリングと制御	1-20
複数ノードへの処理タスクの分散	1-22
OAM Web ベース・ユーティリティ	1-23
共通の OAM 操作	1-23
OAM のインタフェース	1-24
OAM へのアクセス	1-26

2 インストールおよびアップグレード

インストールおよびアップグレード	2-2
インストール	2-2
アップグレード	2-2
Rapid Install	2-3
新規システムのインストール	2-4
リリース 11i システムからリリース 12 へのアップグレード	2-5
新規テクノロジ・スタックのインストール	2-5
Rapid Install のインタフェース	2-5
Rapid Install の実行	2-6
AutoPatch	2-8
AutoPatch のインタフェース	2-9
AutoPatch の実行	2-9
他のパッチ・ツール	2-9

3 構成

システム構成	3-2
Web ベースの構成ユーティリティ	3-2
コマンドラインから実行する構成ユーティリティ	3-2
AD Splicer	3-3
制御ファイル	3-3
AD Splicer のインタフェース	3-4
AD Splicer の実行	3-4
File Character Set Converter	3-5
必須パラメータ	3-5
File Character Set Converter のインタフェース	3-5
File Character Set Converter の実行	3-5

4 メンテナンス

システム・メンテナンス	4-2
AD Administration の概要	4-2
プロンプト	4-2
非対話型処理の準備	4-3
AD Administration のインタフェース	4-4
AD Administration の対話型実行	4-5
アプリケーション・ファイルの生成	4-6
メッセージ・ファイルの生成	4-6
Forms ファイルおよびレポート・ファイルの生成	4-7
製品 JAR ファイルの生成	4-7
アプリケーション・ファイルのメンテナンス	4-8
アプリケーション・プログラムの再リンク	4-8
アプリケーション環境ファイル（レジストリ内のサブキー）の作成	4-9
ファイルの宛先へのコピー	4-9
キャラクタ・セットの変換	4-10
スナップショット情報のメンテナンス	4-11
欠落ファイルのチェック	4-12

データベース・エンティティのメンテナンス	4-13
データベース・エンティティのコンパイルまたは再ロード	4-13
アプリケーション・データベース・エンティティのメンテナンス	4-14
メンテナンス・モードの変更	4-16
AD Relink	4-17
ログ・ファイル	4-17
コマンドライン引数	4-17
AD Relink のインタフェース	4-18
AD Relink の実行	4-18

5 レポート

Oracle Applications のレポート・ツール	5-2
レポート・ツール	5-2
AD Job Timing Report	5-2
AD Job Timing Report のインタフェース	5-2
AD Job Timing Report の実行	5-3
AD Configuration Report	5-3
AD Configuration Report のインタフェース	5-3
AD Configuration の実行	5-4
AD File Identification Report	5-4
コマンドライン引数	5-4
AD File Identification Report のインタフェース	5-5
AD File Identification の実行	5-5
AD Check Digest	5-6
AD Check Digest インタフェース	5-6
パラメータ	5-6
AD Check Digest の実行	5-6

索引

はじめに

このドキュメントは、『Oracle Applications メンテナンス・プロシージャ』および『Oracle Applications パッチ・プロシージャ』とともに、Oracle Applications ユーティリティおよびアプリケーション・ファイル・システムやデータベースのメンテナンスに関連する手順を説明する Oracle Applications の保守ドキュメンテーション・セットを構成します。『Oracle Applications メンテナンス・ユーティリティ』では、ユーティリティの一般的な内容について説明します。

対象読者

このマニュアルは、Oracle Applications システムのメンテナンス関連タスクを実行するデータベース管理者およびシステム管理者を対象としています。

ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクル社は、障害のあるお客様にもオラクル社の製品、サービスおよびサポート・ドキュメントを簡単にご利用いただけることを目標としています。オラクル社のドキュメントには、ユーザーが障害支援技術を使用して情報を利用できる機能が組み込まれています。HTML 形式のドキュメントで用意されており、障害のあるお客様が簡単にアクセスできるようにマークアップされています。標準規格は改善されつつあります。オラクル社はドキュメントをすべてのお客様がご利用できるように、市場をリードする他の技術ベンダーと積極的に連携して技術的な問題に対応しています。オラクル社のアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト <http://www.oracle.com/accessibility/> を参照してください。

ドキュメント内のサンプル・コードのアクセシビリティについて

スクリーン・リーダーは、ドキュメント内のサンプル・コードを正確に読めない場合があります。コード表記規則では閉じ括弧だけを行に記述する必要があります。しかし一部のスクリーン・リーダーは括弧だけの行を読まない場合があります。

外部 Web サイトのドキュメントのアクセシビリティについて

このドキュメントにはオラクル社およびその関連会社が所有または管理しない Web サイトへのリンクが含まれている場合があります。オラクル社およびその関連会社は、それらの Web サイトのアクセシビリティに関しての評価や言及は行っておりません。

Oracle サポート・サービスへの TTY アクセス

アメリカ国内では、Oracle サポート・サービスへ 24 時間年中無休でテキスト電話 (TTY) アクセスが提供されています。TTY サポートについては、(800)446-2398 にお電話ください。アメリカ国外からは、+1 (407) 458-2479 にお電話ください。

関連ドキュメント

このマニュアルには、当初発行された時点での最新情報が記載されています。このマニュアルは、リリース 12 のソフトウェア・バンドルに同梱されている Oracle Applications Document Library に収録されています。このドキュメントおよび他のドキュメントの以降のバージョンで、リリース間の変更が大幅に行われた場合は、再発行されることが保証されています。最新版は次の URL から入手できます。

<http://www.oracle.com/technology/documentation/applications.html>

Oracle MetaLink にも、すべてのドキュメント・リソースのリストが記載されています。『Oracle Applications Documentation Resources』(Doc ID:394692.1) を参照してください。

次に、メンテナンス・タスクに特に関連するリファレンスを示します。

- 『Oracle Applications メンテナンス・プロシージャ』
- 『Oracle Applications メンテナンス・ユーティリティ』
- 『Oracle Applications パッチ・プロシージャ』
- 『Oracle Applications システム管理者ガイド - 構成』
- 『Oracle Applications システム管理者ガイド - メンテナンス』
- 『Oracle Applications システム管理者ガイド - セキュリティ』

表記上の規則

このマニュアルでは、次の表記上の規則を使用します。

規則	意味
UNIX: Windows:	プラットフォーム固有の情報を示します。このマニュアルには、UNIX と Windows の両方のプラットフォームに関する情報が記載されています。UNIX プラットフォームに関する情報はすべて、明記されている場合を除き、Linux プラットフォームにも適用されます。
\$ または C:¥>	プラットフォーム固有のコマンド・プロンプトを表します。別のプロンプトが表示される場合もあります。
Monospace text	コマンドライン・テキストです。このテキストを表記どおりに入力してください。
<>	山カッコで囲まれたテキストは変数を表します。変数テキストを値に置き換えます。山カッコは入力しません。
[]	オプションの項目か、ファンクション・キーを示します。大カッコは入力しません。
	複数のオプションのうちの OR オプションを表します。1 つのオプションのみを入力する必要があります。縦線は入力しません。
¥	オンラインで入力したコマンドの例では、行の最後にある円記号は、コマンド全部を 1 行で入力する必要があることを示します。円記号は入力しません。
特別な注	追加情報、注意、警告などは、マニュアルの本文にある特別な情報について注意をうながすものです。

サポートおよびサービス

次の各項に、各サービスに接続するための URL を記載します。

Oracle サポート・サービス

オラクル製品サポートの購入方法、および Oracle サポート・サービスへの連絡方法の詳細は、次の URL を参照してください。

<http://www.oracle.co.jp/support/>

製品マニュアル

製品のマニュアルは、次の URL にあります。

<http://otn.oracle.co.jp/document/>

研修およびトレーニング

研修に関する情報とスケジュールは、次の URL で入手できます。

<http://www.oracle.co.jp/education/>

その他の情報

オラクル製品やサービスに関するその他の情報については、次の URL から参照してください。

<http://www.oracle.co.jp>

<http://otn.oracle.co.jp>

注意： ドキュメント内に記載されている URL や参照ドキュメントには、Oracle Corporation が提供する英語の情報も含まれています。日本語版の情報については、前述の URL を参照してください。

スタート・ガイド

この章では、コマンドラインと Web ベースの両方の Oracle Applications メンテナンス・ユーティリティに関する基本的な情報を説明します。この章には次の項があります。

- Oracle Applications メンテナンス・ユーティリティ
- AD コマンドライン・ユーティリティ
- パラレル処理の使用
- OAM Web ベース・ユーティリティ

Oracle Applications メンテナンス・ユーティリティ

Oracle Applications システム・メンテナンス・ユーティリティは、Oracle Applications システムのインストールとアップグレード、構成パラメータの更新、データベースとファイル・システムのメンテナンスとパッチの適用、システム・レポートの作成など、様々な操作を実行するために使用します。このマニュアルでは、これらのユーティリティを、アクセスして使用する方法（コマンドラインおよび Web ベースのインタフェース）によって分類してあります。

注意： リリース 12 以降、パッチ適用および AutoPatch に関するすべての情報は、個別のマニュアル『Oracle Applications パッチ・プロシージャ』に移動しました。

コマンドライン・ユーティリティ

このユーティリティは通常、AD ユーティリティ（AD は Applications DBA の略称）と呼ばれ、コマンドラインから起動および実行されます。この AD ユーティリティによって、パッチの適用とマージや、様々なシステム・メンテナンス・タスクの起動など、多くのタスクがキックオフされます。ユーティリティの実行時には、メンテナンス・タスクの実行に必要なシステム固有のパラメータの入力を要求するプロンプトが表示されます。さらに、多くのユーティリティでレポートが生成され、レポートには、ジョブのタイミングやファイルのバージョンなどの情報が含まれます。

AD ユーティリティのインタフェース、操作、入力およびレポート書式は類似しています。多くのユーティリティは、引数、フラグおよびオプションを受け入れる機能も共有しているため、この機能を使用すると、実行する処理を調整できます。コマンドラインの引数は、ユーティリティの起動時に追加します。たとえば、パッチの適用時に、AutoPatch でパラレルに実行する必要があるワーカーの数を指定するには、AutoPatch を起動するときに、コマンドラインにワーカー・プロセスの数を指定します。共通して使用されるコマンドライン引数とフラグのリストと使用方法の簡単な説明は、この章の 1-10 ページ以降で説明します。

特に明記のないかぎり、次の表の AD ユーティリティは、このマニュアルで説明します。

AD ユーティリティ名	実行可能プログラム	説明
AD Administration	adadmin	Oracle Applications に対してメンテナンス・タスクを実行します。
AD Check Digest	adchkdig	Oracle MetaLink からダウンロードした Oracle Applications パッチの整合性をチェックします。
AD Configuration	adutconf.sql	Oracle Applications のインストール済みの構成に関する標準の情報をレポートします。
AD Controller	adctrl	AD Administration および AutoPatch のパラレル・ワーカーを管理します。
AD File Identification	adident	Oracle Applications ファイルのバージョンと翻訳レベルをレポートします。
AD File Character Set Converter	adncnv	ファイルのキャラクタ・セットを別のキャラクタ・セットに変換します。
AD Merge Patch*	admrgpch	複数のパッチを単一のマージ・パッチにマージします。
AD Relink	adrelink.sh	Oracle Applications 実行可能プログラムを Oracle サーバー製品ライブラリに再リンクします。
AD Splicer	adsplce	オフサイクル製品を追加します。
AD Job Timing Report*	adtimrpt.sql	パラレル・ワーカーが実行するジョブに関するタイミングの要約をレポートします。
AutoPatch*	adpatch	パッチおよび他のシステム更新を適用します。

AD ユーティリティ名	実行可能プログラム	説明
Rapid Install**	rapidwiz	Oracle Applications システムの新規インストールまたはアップグレードに固有のパラメータを入力するためのウィザードを提供します。

* パッチおよびパッチ・ユーティリティの詳細は、『Oracle Applications パッチ・プロシージャ』を参照してください。

** ここでは、Rapid Install の基本操作について説明します。Rapid Install を使用して Oracle Applications システムをインストールまたはアップグレードする手順の詳細は、『Oracle Applications インストレーション・ガイド: Rapid Install の使用方法』を参照してください。

Web ベース・ユーティリティ

Oracle Applications Manager (OAM) には、Web ベースのインタフェースが用意されています。このインタフェースによって、システム管理者は、システム・ステータスのモニター、サービスの管理、システム構成の検査、Oracle Workflow の管理、適用済パッチの表示およびシステム使用の測定をそれぞれ実行できます。このインタフェースは、使用している Oracle Applications システムの状態に関する簡単な概要を提供し、システム構成の管理、パッチ履歴の確認、システムを最新の状態にするパッチの判別、追加製品と言語の登録および他のメンテナンス・アクティビティを可能にするユーティリティへのゲートウェイとしての機能を果たします。

追加情報：『Oracle Applications 概要』の「Oracle Applications Manager」を参照してください。

下表に Web ベースのメンテナンス・ユーティリティを示します。これらのユーティリティの機能の詳細は、『Oracle Applications パッチ・プロシージャ』または『Oracle Applications システム管理者ガイド - 構成』を参照してください。

OAM ユーティリティ名	説明
AutoConfig*	現行のコンテキスト・ファイルの表示、そのコンテキスト・ファイルにあるパラメータの編集、以前のコンテキスト・ファイルの表示、および現行と以前のコンテキスト・ファイルの比較に使用します。
License Manager*	追加の Oracle Applications 製品、国固有の機能または言語を登録します。ライセンス・マネージャを使用すると、システムの基礎言語を変更することもできます。
Patch Wizard**	システムを最新の状態に維持するために適用する必要があるが、まだ適用されていないパッチを判別します。Oracle MetaLink からパッチをダウンロードしてマージします。
Applied Patches**	パッチ履歴データベースの主要なパッチ情報を使用します。データベースを検索し、様々な書式でレポートを作成できます。
Registered Flagged Files**	カスタマイズしたすべてのファイルを記録します。以前のリリースでカスタマイズしたすべてのファイルの記録を含む applcust.txt のかわりに使用されます。
Software Updates**	システムのすべてのパッチ関連情報の概要を提供します。

* 『Oracle Applications システム管理者ガイド』を参照してください。

** 『Oracle Applications パッチ・プロシージャ』を参照してください。

オンライン・ヘルプ

AD ユーティリティと OAM ユーティリティは、両方ともヘルプ機能を備えています。

コマンドライン・ヘルプ

AD コマンドライン・ユーティリティの場合は、ユーティリティ実行可能プログラム（起動コマンド）を入力し、`help=y` を追加することで、引数のリストを要求できます。たとえば、AutoPatch のヘルプにアクセスするには、次のように入力します。

```
adpatch help=y
```

次に、ユーティリティ操作の調整に使用できる引数とオプションを、その動作方法の簡単な説明とともに示します。これは、AutoPatch のコマンドライン・ヘルプからの抜粋です。

```
usage: adpatch [help=y]
       adpatch Pre-Install Mode
           [preinstall=y|n]
       adpatch Test Mode
           [apply=y|n]
       adpatch Non-Interactive mode
           [defaultsfile=<$APPL_TOP/admin/SID/defaultsfile>]
           [logfile=<logfile>] [interactive=y|n] [workers=<workers>]
           [patchtop=<patchtop>] [driver=<driver_file>] [restart=y|n]
           [abandon=y|n] [wait_on_failed_job=y|n]
       adpatch
           [localworkers=<localworkers>] [workers=<workers>]
           [printdebug=y|n] [parallel_index_threshold=<threshold_value>]
           [order=<order>] [flags=<flags>] [options=<options>]
```

where

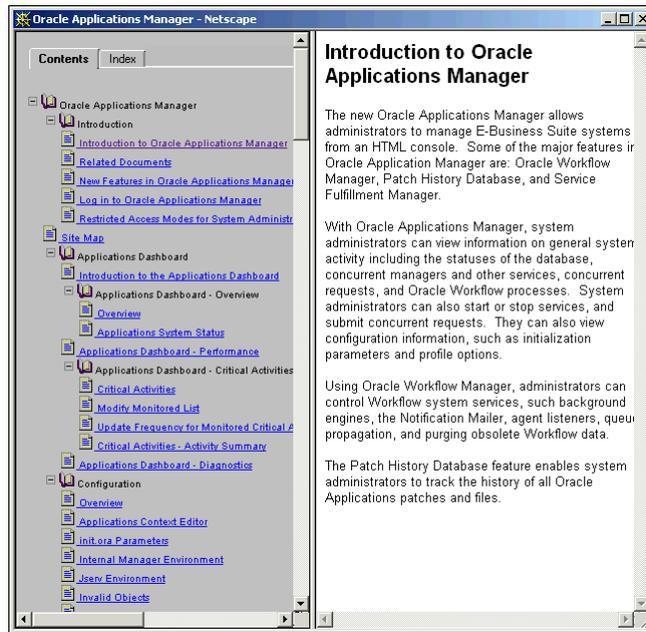
- * `help=y` - Prints help information about adpatch options.
- * `preinstall` - To run adpatch in Pre-Install Mode.
Default - No.
- * `apply` - To run adpatch in Test Mode.
Default - Yes.
- * `interactive` - Invokes adpatch in Non-Interactive mode when
"interactive=no" is specified.
Default - Yes.

OAM ヘルプ

OAM ヘルプは、Web ベースのディレクトリ・ツリー形式で記述されています。このツリーには、Site Map または Applications Dashboard の概要と使用可能な特定の機能がリストされています。メニューにアクセスするには、Oracle Applications Manager の任意のページで「Help」アイコンをクリックします。たとえば、「Site Map Administration」タブで「Help」アイコンをクリックします。



OAM ヘルプ・ディレクトリは別のウィンドウに表示されます。「Contents」タブまたは「Index」タブをクリックし、分岐を拡張してツリー全体を表示します。



他のトピックを表示するにはプラス記号をクリックし、そのトピックの情報にアクセスするには個々のリンクをクリックします。

各トピックには、項目の説明、手順およびページの説明が含まれます。このマニュアルで説明するユーティリティと機能に関連したヘルプでは、ナビゲータ・パス、フィールド定義およびページの使用法に関する一般的な情報が提供されます。

AD コマンドライン・ユーティリティ

AD メンテナンス・ユーティリティは、Oracle Applications の特定のメンテナンス・タスクとレポート作成タスクをコマンドラインから実行するように開発されました。たとえば、AutoPatch を使用してすべてのタイプのパッチをシステムに適用し、AD Administration を使用して定常的なメンテナンス・タスクを実行します。

ユーティリティごとに専門の機能がありますが、それぞれのユーティリティが相互に補完するように設計されています。このため、多くの（ほとんどすべての）ユーティリティでは類似した操作を採用します。この項では、複数の AD ユーティリティに共通する操作をまとめます。次の各章では、各ユーティリティ固有の特徴を詳細に説明します。

追加情報： AD ユーティリティを使用して実行する特定のタスクは、『Oracle Applications メンテナンス・プロシージャ』を参照してください。AutoPatch および AD Merge Patch については、『Oracle Applications パッチ・プロシージャ』も参照してください。

共通の AD 操作

多くの AD ユーティリティは、タスクを処理する際に類似した機能および操作を使用します。たとえば、ほとんどのユーティリティでは、プロンプトを使用してシステム固有の処理に関する値を収集し、ログ・ファイルを自動的に作成して処理内容を記録します。この項では、これらの共通した操作について説明します。

追加情報： AutoPatch に適用する AD 操作については、『Oracle Applications パッチ・プロシージャ』も参照してください。

プロンプト

多くの AD ユーティリティでは、タスクの完了に必要な情報を要求するプロンプトを表示します。プロンプトには必要な情報の説明が表示される他、場合によってはデフォルトの回答も（大カッコ内に）表示されます。次に例を示します。

```
The ORACLE username specified below for Application Object Library uniquely identifies  
your existing product group: APPLSYS
```

```
Enter the ORACLE password of Application Object Library [APPS] :
```

[Enter] キーを押してデフォルト値を受け入れるか、コロンの後に新しい値を入力して [Enter] を押します。正しい情報を入力するために、プロンプトを注意して読んでください。

対話型と非対話型の処理

デフォルトでは、AD ユーティリティは処理タスクを対話型で実行します。つまり、このユーティリティでは、システム固有の情報を要求するプロンプトが必要な時点で表示されます。ユーザーはこれらのプロンプトに応答するために、操作全体にわたって待機する必要があります。

AD Administration、AutoPatch および AD Controller では、ファイル・システムとデータベースに関する一部のタスクを非対話型で実行できます。必要な情報はデフォルト・ファイルに格納します。このユーティリティでは、プロンプトに応答して通常入力する内容を要求するかわりに、このファイルから情報を読み取ります。非対話型の処理は、ユーザーの操作をほとんど必要としないルーチン・タスクをスケジューリングする場合に便利です。

追加情報： 『Oracle Applications メンテナンス・プロシージャ』の「非対話型メンテナンス・タスクの実行」を参照してください。非対話型による AD Controller の実行は、この章の「[パラレル処理のモニタリングと制御](#)」も参照してください。

ログ・ファイル

すべての AD ユーティリティでは、処理および発生したエラーがログ・ファイルに記録されます。多くのユーティリティでは、処理セッションを記録するログ・ファイルの名前を要求するプロンプトが表示されます。

<utility name> records your <utility name> session in a text file you specify. Enter your <utility name> log file name or press [Return] to accept the default name shown in brackets.

Filename [<utility name>.log] :

デフォルトのファイル名は、<utility name>.log です。たとえば、AD Administration のデフォルト・ログ・ファイルは adadmin.log、AutoPatch のログ・ファイルは adpatch.log です。

AD Administration (および AutoPatch) の場合、ログ・ファイルは、UNIX では \$APPL_TOP/admin/<SID>/log に配置されます。<SID> は ORACLE_SID または TWO_TASK 変数の値を示します。Windows では %APPL_TOP%\admin\<SID>\log に配置されます。<SID> は LOCAL 変数の値を示します。Rapid Install および AutoConfig で作成されたログ・ファイルは、\$APPL_TOP/admin/<CONTEXT_NAME>/log ディレクトリに配置されます。

他のユーティリティでは、ログ・ファイル名を要求するプロンプトを表示しない場合があります。通常、そのユーティリティが実行されたディレクトリにログ・ファイルが書き込まれます。

再起動ファイル

再起動ファイルには、すでに完了した処理に関する情報が含まれます。これらは、\$APPL_TOP/admin/<SID>/restart (UNIX) または %APPL_TOP%\admin\<SID>\restart (Windows) に格納されます。

処理中に、あるユーティリティがエラーで停止した場合は、AD Controller を使用して (パラレル処理の場合)、タスク処理を実行しているワーカーを停止します。このユーティリティは再起動できます。再起動すると、再起動ファイルが検索され、前のセッションの存在の有無が判断されます。ファイルが存在する場合、ユーティリティは、停止した場所から処理を続行するように要求するプロンプトを表示するか、または新規の処理を開始します。続行を選択すると、ユーティリティは再起動ファイルを読み取って処理が停止した場所を確認し、そこから処理を続行します。

注意： マネージャまたはワーカーの再起動ファイルは、Oracle サポート・サービスから特に指示された場合以外は、変更または削除しないでください。

デフォルトでは、AD ユーティリティは、処理完了時に再起動ファイルを削除します (拡張子が .bak、.bk2 または .bk3 のバックアップ・バージョンはそのまま残ります)。

注意： 再起動ファイルには、使用している Oracle Applications 製品へのパスワードが記録されます。すべての再起動ファイル (\$APPL_TOP/admin/<SID>/restart にある) に対するアクセスを制限する必要があります。options=nohidepw でユーティリティを実行している場合は、先頭に HIDEPW が付いた行のパスワードもログ・ファイルに保存されます。

構成ファイルと環境ファイル

ほとんどの AD ユーティリティでは、メンテナンス・タスクの処理時に、様々な構成ファイルと環境ファイルに保存されているシステム・パラメータへのアクセスが必要です。たとえば、iAS ORACLE_HOME または RDBMS ORACLE_HOME の場所を認識する必要がある場合があります。

構成ファイルと環境ファイルは、インストールまたはアップグレード時に、AutoConfig によって生成されます。通常は、ユーザーがこれらのファイル内の情報を手動で更新またはメンテナンスする必要はありません。AutoConfig スクリプトを実行すると更新されます。

追加情報：『Oracle Applications 概要』の AutoConfig に関する説明を参照してください。『Using AutoConfig to Manage System Configurations in Release 12』(Doc ID:387859.1) も参照してください。

次の表に、複数の AD コマンドライン・ユーティリティで共通して使用される構成ファイルと環境ファイルを示します。OAM Web ベース・ユーティリティで使用される場合もあります。<CONTEXT_NAME> のデフォルトは、<SID>_<hostname> に設定されます。

ファイル名	場所	説明
adconfig.txt	APPL_TOP/admin	すべての AD ユーティリティが使用する環境情報が格納されるファイル。このファイルは、手動で更新しないでください。
<CONTEXT_NAME>.env (UNIX)	iAS ORACLE_HOME	iAS ORACLE_HOME でメンテナンス操作を実行するときに、環境の構成に使用されるファイル。
<CONTEXT_NAME>.cmd (Windows)		
<CONTEXT_NAME>.env (UNIX)	RDBMS ORACLE_HOME	データベースでメンテナンス操作を実行するときに、環境の構成に使用されるファイル。
<CONTEXT_NAME>.cmd (Windows)		
APPS<CONTEXT_NAME>.env (UNIX)	APPL_TOP	以前のリリースで名前指定された APPSORA。このファイルは、APPL_TOP および Applications ORACLE_HOME の設定に必要な環境ファイルをコールします。
APPS<CONTEXT_NAME>.cmd (Windows)		
<CONTEXT_NAME>.env (UNIX)	APPL_TOP	APPL_TOP を設定するために、APPS<CONTEXT_NAME>.env ファイル (UNIX) または APPS<CONTEXT_NAME>.cmd ファイル (Windows) によってコールされるファイル (このファイルは、adovars.env または adovars.cmd をコールします)。
<CONTEXT_NAME>.cmd (Windows)		
<CONTEXT_NAME>.env (UNIX)	Applications ORACLE_HOME	Applications ORACLE_HOME を設定するために、APPS<CONTEXT_NAME>.env ファイル (UNIX) または APPS<CONTEXT_NAME>.cmd ファイル (Windows) によってコールされるファイル。
<CONTEXT_NAME>.cmd (Windows)		
adovars.env (UNIX)	APPL_TOP/admin	APPL_TOP にある <CONTEXT_NAME>.env ファイル (UNIX) または <CONTEXT_NAME>.cmd ファイル (Windows) によってコールされるファイル。Java および HTML の環境変数を設定するために使用されます。
adovars.cmd (Windows)		

次の構成ファイルと環境ファイルは、ほとんどの AD ユーティリティで使用されますが、AutoConfig では作成されません。このファイルは、手動で更新しないでください。

ファイル名	場所	説明
applora.txt	APPL_TOP/admin	実行時に必要な init.ora パラメータに関する情報が格納されるファイル。
applorau.txt	APPL_TOP/admin	インストールおよびアップグレードに必要な init.ora パラメータに関する情報が格納されるファイル。
applprod.txt	APPL_TOP/admin	AD ユーティリティの製品摘要ファイル。すべての製品および製品の依存性を識別するために使用されます。
appltterr.txt	APPL_TOP/admin	AD ユーティリティの地域摘要ファイル。サポート対象のすべての地域およびローカライゼーションに関する情報が格納されます。
fnenv.env	FND_TOP	Oracle Application Object Library によって使用される、追加の環境変数を設定するファイル。デフォルト値はすべてのお客様に適用できるように設定されています。

機能バージョン

一部の AD Administration 機能および AutoPatch 機能を使用するためには、その機能のバージョン番号がファイル・システムとデータベースの両方で同一である必要があります。これらの機能バージョンが一致しない場合もあります。たとえば、パッチが完了まで正常に実行されなかった場合、ファイル・システムは更新されているが、データベースは更新されていない可能性があります。この場合は、ファイル・システムのバージョンとデータベースのバージョン間に差異が生じます。

AD Administration または AutoPatch を起動すると、情報マトリックスが画面にスクロール表示されます。このマトリックスは、ステータス (Active=<Yes または No>) と CHECKFILE、PREREQ、CONCURRENT_SESSIONS、PATCH_HIST_IN_DB、PATCH_TIMING および SCHEMA_SWAP の各機能のバージョン番号を示しています。

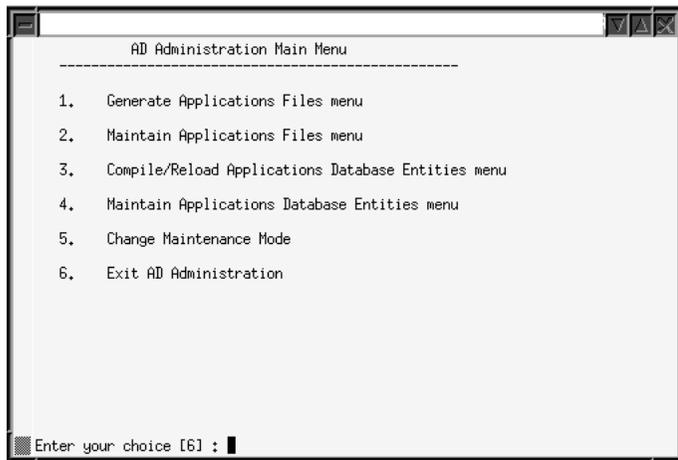
マトリックスは情報専用です。機能バージョンの不一致がないかぎり、処理は不要です。不一致がある場合は、OAM の適用済パッチ・ユーティリティを使用して正常に適用されたパッチを確認し、バージョン・レベルを検証できます。

追加情報：『Oracle Applications パッチ・プロシージャ』の適用済パッチ情報に関する説明を参照してください。

AD のインタフェース

一部の AD ユーティリティは、単一の機能を実行するように設計されています。たとえば、AD Relink は実行可能プログラムをサーバー製品ライブラリに再リンクするためだけに実行します。これらのユーティリティでは、メニューや入力画面を使用しません。すべてのユーザー操作は、コマンドラインからプロンプト形式で実行します。

ただし、他のユーティリティには複数の機能があり、その内容はメニューや入力画面に表示されます。たとえば、AD Administration を実行すると、最初の画面にメイン・メニューが表示されます。



この最初の画面からサブメニューを 1 つ選択し、そのメニューから実行する処理を選択します。

コマンドライン引数

AD ユーティリティの操作方法は、ユーティリティの起動コマンドに修飾子を追加することで指定できます。修飾子は、引数、フラグまたはオプションの形式で指定できます。ユーティリティが実行する処理は、この修飾子によってすべて調整されます。

コマンドライン引数、フラグおよびオプションは「token=value」の形式で、token は修飾子の名前です。引数と値は両方とも小文字で入力する必要があります（通常、「token」部分はユーティリティで自動的に小文字に変換されますが、「value」部分は変換できません）。

次に例を示します。

```
$ adadmin LOGFILE=TEST.LOG
```

トークン（「LOGFILE」）は小文字に変換されますが、値（TEST.LOG）はユーティリティによって認識されません。このコマンドの正しい入力方法は、次のとおりです。

```
$ adadmin logfile=test.log
```

単一のコマンドラインに 1 つ以上の token=value 引数を入力するには、次の AutoPatch コマンドのように、複数の引数を空白スペースで区切ります。

```
$ adadmin printdebug=y flags=hidepw
```

1 つ以上の値を 1 つのトークンに含める場合もあります。この場合は、複数の値をカンマで区切ります。次に例を示します。

```
$ adadmin flags=nohidepw,trace
```

カンマ区切りのリストには空白スペースを含めないでください。たとえば、次のコマンドは無効です。

```
$ adadmin flags=nohidepw, trace
```

複数のユーティリティによって使用されるコマンドライン引数もあります。次の表に詳細を示します。他の引数は、特定のユーティリティに対してのみ使用されます。たとえば、AutoPatch では、そのユーティリティに固有なコマンドライン引数とオプションが広範囲に使用されます。これらについては、『Oracle Applications パッチ・プロシージャ』で説明します。

abandon	説明
使用するユーティリティ	AD Administration、AutoPatch
目的	既存の非対話型セッションを中止するように AD ユーティリティに指示します。interactive=n とともに指定した場合のみ使用できます。
値	y または n
デフォルト	n。非対話型で実行した最後のユーティリティでは、処理が正常に完了していません。
例	adadmin interactive=n abandon=y

defaultsfile	説明
使用するユーティリティ	AD Administration、AutoPatch、AD Controller
目的	AD ユーティリティの対話型質問への回答を格納するデフォルト・ファイルを指定します。通常は非対話型で使用します。
値	完全修飾されたファイル名。このファイルは、\$APPL_TOP/admin/<SID> ディレクトリの下に存在している必要があります。
デフォルト	なし。デフォルト・ファイルは使用されません。
例	adctrl defaultsfile=/d1/apps/prodappl/admin/prod1/prod_def.txt

help	説明
使用するユーティリティ	すべての AD ユーティリティ
目的	使用可能なコマンドライン・オプションを要約します。
値	y または n
デフォルト	n
例	adadmin help=y

interactive	説明
使用するユーティリティ	AD Administration、AutoPatch、AD Controller
目的	対話型で実行するか、非対話型で実行するかを AD ユーティリティに指示します。
値	y または n
デフォルト	y。ユーティリティは対話型で実行されます。
例	adadmin interactive=n

localworkers	説明
使用するユーティリティ	AD Administration、AutoPatch
目的	分散 AD 環境の主ノードで実行するワーカーの数を指定します。
値	1 から使用中のデータベースでサポートされる最大数まで（ただし、999 以下）。
デフォルト	デフォルトは workers 引数の値です。つまり、主ノードで実行されるすべてのワーカーです。
例	adadmin workers=8 localworkers=3

logfile	説明
使用するユーティリティ	すべての AD ユーティリティ
目的	使用するログ・ファイルを AD ユーティリティに指示します。通常は、ユーティリティを非対話型で実行する際に使用されます。
値	ファイル名（完全修飾されたパス名ではありません）
デフォルト	なし。ユーティリティは、ログ・ファイル名の入力を要求するプロンプトを表示します。
例	adctrl logfile=test.log

menu_option	説明
使用するユーティリティ	AD Administration、AD Controller
目的	ユーティリティの 1 つを非対話型で実行しているときに、デフォルト・ファイル内の処理を特定のメニュー項目に接続するために使用します。
値	該当するユーティリティの摘要にあるメニュー・オプションのリストを参照してください。interactive=n、defaultfile=<name of defaults file> とともに使用する必要があります。
デフォルト	N/A
例	adctrl interactive=n defaultfile=\$APPL_TOP/admin/prod/ctrldefs.txt menu_option=SHOW_STATUS

parallel_index_threshold	説明
使用するユーティリティ	AD Administration、AutoPatch
目的	表内のブロック数を指定します。表内のブロック数がしきい値設定より少ない場合は、パラレル・ワーカーとシリアル DML を使用して索引が作成されます。表内のブロック数がしきい値設定より多い場合は、1 つのワーカーとパラレル DML を使用して索引が作成されます。
値	0 ～ 2147483647。0（ゼロ）に設定した場合、索引は、パラレル・ワーカーとシリアル DML を使用して作成されます。
デフォルト	20000。つまり、しきい値は 20,000 ブロックです。
例	adadmin parallel_index_threshold=15000

printdebug	説明
使用するユーティリティ	すべての AD ユーティリティ
目的	その他のデバッグ情報を表示するように AD プログラムに指示します。その他のデバッグ情報の量が、非常に多い場合もあります。
値	y または n
デフォルト	n
例	adadmin printdebug=y

restart	説明
使用するユーティリティ	AD Administration、AutoPatch、AD Controller
目的	既存のセッションを再起動するために、非対話型の実行を AD ユーティリティに指示します。interactive=n とともに指定した場合のみ有効です。
値	y または n
デフォルト	n。非対話型で実行されるユーティリティは、完全に新しいセッションを実行します。
例	adadmin interactive=n restart=y

wait_on_failed_job	説明
使用するユーティリティ	AD Administration、AutoPatch
目的	ジョブが異常終了したときは、非対話型セッションでのユーザー入力を待機するようにユーティリティに指示します。
値	y または n
デフォルト	n
例	adadmin wait_on_failed_job=yes

workers	説明
使用するユーティリティ	AD Administration、AutoPatch
目的	実行するワーカーの数を指定します。通常は、ユーティリティを非対話型で実行する際に使用されます。
値	1 から使用中のデータベースでサポートされる最大数まで（ただし、999 未満）。
デフォルト	なし。プログラムは、実行するワーカー数の入力を要求するプロンプトを表示します。
例	adadmin workers=8

AD フラグ

flags= 引数は、すべての AD ユーティリティで使用されます。この引数は、いくつかある汎用的なフラグの 1 つをユーティリティに渡します。1 つのフラグまたはカンマで区切られたフラグのリストを入力します。デフォルトは「なし」です。

hidepw	説明
デフォルト	hidepw
目的	AD ユーティリティのログ・ファイルにパスワードを表示するか、しないかをユーティリティに指示します。
コメント	デフォルトでは、パスワードが含まれる AD ユーティリティのログ・ファイルの行は、パスワードを非表示にするよう変更されます。 nohidepw を指定すると、非表示のパスワードを含む各行の後に、接頭辞 HIDEPW 付きの対応する行が続き、元の行がパスワードとともに表示されます。
例	adadmin flags=nohidepw

logging	説明
デフォルト	logging
目的	logging または nologging を使用して索引を作成するかどうかを AD ユーティリティに指示します。
コメント	索引の作成時に flags=nologging を使用すると、パフォーマンスが向上する場合があります。ただし、flags=nologging によって、データベース・メディアのリカバリが不完全になり、スタンバイ・データベースは動作しなくなります。 logging は AutoPatch のデフォルトで、データベース・メディアのリカバリとスタンバイ・データベースをサポートします。AutoPatch の実行前後に完全なバックアップを作成しないかぎり、本番システムに flags=nologging を使用することはお勧めしません。 flags=nologging は、SQL スクリプトではなく、ODF によって作成された索引にのみ影響します。XDF ユーティリティでは、常に logging を使用して索引が作成されます。
例	adpatch flags=logging

trace	説明
デフォルト	notrace
目的	すべてのデータベース処理をトレース・ファイルに記録するかどうかを AD ユーティリティに指示します。
コメント	AD ユーティリティの実行中に作成された RDBMS トレース・ファイルがデバッグを支援することがあります。flags=trace オプションにより、AD ユーティリティおよび AD ワーカーで使用される複数のトレース・ファイルが作成されます。AD ユーティリティまたはワーカーがデータベースに接続するたびに、新規トレース・ファイルが作成されます。 flags=trace では、AD ユーティリティ内でのデータベース処理のみがトレースされます。AD ユーティリティによって実行される SQL スクリプトまたは外部プログラムでのデータベース処理は、flags=trace では記録されません。
例	adadmin flags=trace

AD ユーティリティは他の引数を受け入れます。ただし、他の引数は、Oracle サポート・サービスから指示された場合のみ使用してください。

AD ユーティリティの実行

AD ユーティリティを実行するには、システム構成パラメータを定義する環境を設定します。たとえば、あるユーティリティで、Applications ORACLE_HOME へのディレクトリ・パスが必要な場合があります。このパラメータおよび他のパラメータによって、使用するシステム環境が構成されます。

注意： 環境を設定する前に、Windows ユーザーは Windows サービスも構成する必要があります。

追加情報： 1-8 ページの「[構成ファイルと環境ファイル](#)」を参照してください。

適切な環境にユーティリティを指定した後は、実行可能プログラム（起動コマンド）を入力して起動します。

環境の設定

アプリケーション環境を設定するには、次のステップを実行してください。プラットフォーム固有の追加ステップについては、『Oracle Installation and Upgrade Notes』を参照してください。

1. `applmgr`（アプリケーション・ファイル・システム所有者）でログインします。
2. 現在の `APPL_TOP` およびデータベースの環境ファイル（UNIX）またはコマンド・ファイル（Windows）を実行します。

UNIX:

通常、環境ファイルは `APPS<CONTEXT_NAME>.env` で、`APPL_TOP` の下にあります。Bourne、Korn または Bash シェルから、次のように入力します。

```
$ . APPS<CONTEXT_NAME>.env
```

Windows:

Windows エクスプローラ、または「スタート」メニューの「ファイル名を指定して実行」を使用して、`%APPL_TOP%\envshell.cmd` を実行します。これにより、「コマンド・プロンプト」ウィンドウが作成され、Oracle Applications の必須の環境設定が表示されます。この「コマンド・プロンプト」ウィンドウで、すべての後続のコマンドを実行します。

3. 環境になんらかの変更を加えた場合は、正しく設定されているかどうかを次のコマンドを入力してチェックします。

UNIX:

```
$ echo $TWO_TASK
$ echo $ORACLE_HOME
$ echo $PATH
```

Windows:

```
C:\> echo %LOCAL%
C:\> echo %ORACLE_HOME%
C:\> echo %PATH%
C:\> echo %APPL_CONFIG%
```

UNIX の場合は、`ORACLE_HOME` を正しいデータベース・ディレクトリに設定し、`TWO_TASK` または `LOCAL` が正しいデータベースを識別できるようにする必要があります。Windows の場合、`APPL_CONFIG` は `<CONTEXT_NAME>` に設定する必要があります。

4. 十分な一時ディスク領域があることを確認します。
一時ディレクトリ \$APPLTMP、\$APPLPTMP および \$REPORTS60_TMP (UNIX)、または %APPLTMP%、%APPLPTMP% および %REPORTS60_TMP% (Windows) に少なくとも 50 MB が必要です。また、オペレーティング・システムのデフォルトの一時ディレクトリ (通常は /tmp または /usr/tmp (UNIX)、C:\temp (Windows)) にも空き領域が必要です。
 5. AD ユーティリティを実行して、Oracle Applications 製品ファイルの再リンクまたは更新、あるいは Oracle Applications データベース・オブジェクトの変更を行う場合、関連するサーバーが含まれたノードにファイルがある場合は、コンカレント・マネージャ、Web サーバー・リスナー、Forms Server リスナーを停止してください。たとえば、コンカレント処理サーバーが含まれるノード上にファイルが存在している場合は、コンカレント・マネージャを停止します。
- 追加情報：**『Oracle Applications システム管理者ガイド - 構成』のコンカレント・マネージャの管理に関する説明を参照してください。
6. メンテナンス・タスクでシステム停止時間が必要な場合は、メンテナンス・モードを使用可能にします。

追加情報： 第 4 章の「メンテナンス・モードの変更」を参照してください。

Windows サービスの構成

AD ユーティリティを Windows プラットフォームで実行する場合は、最初に、すべての Forms サービス、Web リスナー・サービスおよびコンカレント・マネージャ・サービスを停止する必要があります。さらに、データベースとデータベース・リスナーが実行中であることを検証する必要があります。

サービスのステータスを表示および変更するには、次のステップを実行してください。

1. 「スタート」→「設定」→「コントロールパネル」を選択し、「サービス」をダブルクリックします。
2. 適切なサービス名をハイライト表示し、必要に応じて「停止」または「開始」をクリックします。次の表に、AD ユーティリティを実行する際に必要なサービスとステータスを示します。

サービス・タイプ	サービス名	ステータス
Concurrent Manager Services	OracleConcMgr<CONTEXTNAME>	停止
Database Services	OracleService<SID>	開始
Database Listener	Oracle<SID>_<DB_VERS>_RDBMSTNSListener<SID>	開始

ユーティリティの起動

AD ユーティリティを起動するには、そのユーティリティの実行可能プログラム名 (起動コマンド) をコマンド・ラインで入力します。たとえば、AD Administration を起動するには、次のように入力します。

```
$ adadmin
```

追加情報： AD 実行可能プログラムのリストについては、1-2 ページの「コマンドライン・ユーティリティ」を参照してください。

ユーティリティの終了または停止

メニュードリブン・ユーティリティで処理タスクが完了すると、メイン・メニューに戻ります。ここで、他の処理を選択するか、または「Exit」を選択します。AD Administration がその例です。他のユーティリティでは、メニュー形式は使用されません。この場合、ユーティリティは処理が完了すると自動的に終了します。AutoPatch、AD Merge Patch および File Character Set Converter が、その例です。

処理タスクの開始前は、プロンプトで abort を入力することで、ユーティリティを停止できます。このコマンドを使用できるのは、プロンプトを表示するユーティリティのみであり、画面にプロンプトが表示されている場合のみです。

処理を開始したユーティリティが、(エラーが原因で) 処理を完了する前に停止する場合もあります。また、パラレル処理セッション中は、ワーカーを停止することで処理の停止を決定できます。

追加情報： ワーカーの停止と再起動に関する詳細は、『Oracle Applications メンテナンス・プロシージャ』の「トラブルシューティング」を参照してください。

ユーティリティの再起動

ユーティリティは、実行可能プログラムをコマンドラインに入力すると再起動できます。再起動すると、ユーティリティは、新しいログ・ファイルの入力または中断したセッションからのログ・ファイルの指定を要求するプロンプトを表示します。前回のセッションのログ・ファイルを再利用すると、ユーティリティによって、ファイルの終わりにメッセージ「Start of <utility name> session」が追加され、継続セッションで生成されるメッセージが追加されます。

ユーティリティは、次のいずれかの実行を要求するプロンプトを表示します。

■ セッションの継続 (デフォルト)

ユーティリティは、前回セッションの進捗状況を再起動ファイルでチェックし、ユーザーが最後にセッションを停止した時点から処理を開始します。

注意： 「セッションの継続」を選択することをお勧めします。新規セッションを開始すると、最初のセッションの一部の処理が無効化されたり複製される場合があります。

■ 新規セッションの開始

前回のセッションを継続しないように選択した場合は、継続しないことを確認するように求められます。処理は最初から開始されます。

停止した処理がパラレルで実行されていた場合は、FND_INSTALL_PROCESSES 表が存在している可能性があります。存在している場合は、その表を削除するかどうかを尋ねるメッセージが表示されます。AD Administration または AutoPatch が別のセッションまたはノードで実行中かどうかを確認し、そのセッションの完了を待機してから、現在のシステムで新規セッションを開始する必要があります。

追加情報： 1-7 ページの「再起動ファイル」を参照してください。

パラレル処理の使用

システム・リソースを効率的に使用し、特定のメンテナンス・タスクを短時間で完了するために、AutoPatch および AD Administration は、複数のジョブを同時に処理するように設計されています。このパラレル処理では、ワーカー処理を指定するマネージャが使用されます。このマネージャは、各ワーカーに処理ジョブを割り当て、その進捗状況をモニターします。ワーカーがジョブを完了すると、マネージャは、すべてのジョブが完了するまで、そのワーカーに他のジョブを割り当てます。

また、AD Administration と AutoPatch の場合、複数ノード・システムでは、処理タスクを複数のノードに分散するように指示できます。このタイプのパラレル処理操作は、分散 AD と呼ばれています。この処理操作では、システム内にある全ノードの処理機能を利用して、メンテナンス・タスクを完了するための時間を短縮します。

注意： 分散 AD を使用するには、共有アプリケーション層ファイル・システムが必要です。『Oracle Applications メンテナンス・プロシージャ』の「処理タスクの分散」を参照してください。

タスクのパラレル処理

通常、パラレル処理は、次の場合に AD Administration および AutoPatch によって使用されません。

- SQL スクリプトなどのデータベース・ドライバ・タスクを実行する場合。
- フォーム、レポート、メッセージ・ファイルなどの各種ファイルを生成する場合。

ワーカーは、マネージャによって割り当てられた処理タスクを完了します。ユーティリティ自体が、実行するタスクのリストを判別し、実行の優先順位を設定します。また、タスクを実行するワーカーの数を要求するプロンプトを表示します。たとえば、AutoPatch がデータベース・ドライバを適用している場合は、データベース・タスクのリストが作成され、これらのタスクを実行するために同時に実行する必要があるワーカー数を指定するプロンプトが表示されます。

注意： ワーカー・プロセスは、adworker プログラムのインスタンスです。このプログラムは、マネージャ処理によってのみ呼び出され、スタンドアロンでは実行できません。

マネージャ

マネージャは、各ワーカーに一意の ID を割り当て、FND_INSTALL_PROCESSES 表に各ワーカーの行を挿入します。この表を作成すると、ジョブ情報のステージング領域およびワーカーとの通信手段としての機能を果たします。通信は、CONTROL_CODE および STATUS の 2 つの列を使用して行われます。

マネージャは、ジョブ・リストのサブセットを使用して、ワーカーごとに 1 ジョブずつ表を更新します。たとえば、ワーカーが 5 つの場合、表には 5 つのジョブが含まれます（処理の完了に 100 以上のジョブが関連している場合でも）。マネージャはワーカーを起動し、CONTROL_CODE 列および STATUS 列を使用してタスクを割り当てます。これら 2 つの列を連続的にポーリングし、ワーカーからの更新を検索します。ワーカーの割当てが終了すると、マネージャは各行をリスト内の次のタスクで更新し、ワーカーに対して別のメッセージを残します。

すべてのジョブが完了すると、マネージャはワーカーに停止を指示し、（すべてのワーカーが実際に停止したことを確認した後で）FND_INSTALL_PROCESSES 表を削除します。

ワーカー

各ワーカーは、STATUS 列を更新して、進捗状況のレポートをマネージャに示します。ジョブが完了すると、マネージャはキュー内の次のジョブで表を更新し、CONTROL_CODE 列および STATUS 列を更新して、処理の開始をワーカーに指示します。障害が発生した場合、ワーカーは障害ステータスをレポートします。

タスクによっては、複数のワーカー・プロセスが、実際のタスクを行う子プロセスを起動します。起動された子プロセスは、起動元のワーカーにステータス・コードを戻します。ワーカーはコードを解析し、ジョブが正常に完了したかどうかを判断します。子プロセスの例には、SQL*Plus と FNDLOAD があります。

遅延ジョブ

ジョブで初めて障害が発生すると、マネージャは自動的にそのジョブを延期して新規のジョブをワーカーに割り当てます。遅延ジョブの実行で 2 回目の障害が発生すると、マネージャは、ジョブの合計実行時間が 10 分未満である場合のみ、ジョブを再度延期します。遅延ジョブに 3 回目の障害が発生した場合（または 2 回目の障害でジョブの合計実行時間が 10 分以上の場合）、ジョブは障害ステータスのままとなり、ワーカーは待機します。この場合は、障害の原因に対処してから、ジョブを再起動する必要があります。

追加情報： ジョブの再起動は、この章の「[AD Controller の対話型での実行](#)」を参照してください。

遅延ジョブ機能では、AD_DEFERRED_JOBS 表が使用されます。この表は、FND_INSTALL_PROCESSES 表の作成時に作成され、FND_INSTALL_PROCESSES 表の削除時に削除されます。

ワーカー数の決定

AD ユーティリティには、デフォルトのワーカー数（データベース・サーバーにある CPU の数の 2 倍）が用意されています。ワーカーの数は、CPU の数の 2 倍から 4 倍の範囲で選択することをお勧めします。たとえば、データベース・サーバーに 4 つの CPU がある場合は、8 から 16 までの範囲でワーカー数を選択してください。

AD ユーティリティでは、使用しているデータベースがサポートできるワーカーの最大数（999 まで）が計算されます。データベースにサポート可能なワーカー数を超える数は、入力できません。

ワーカー・ログ・ファイル

<utility name>.log ファイルに記録される情報に加え、パラレルでジョブを処理するユーティリティの場合は、エラーに関する詳細がワーカーのログ・ファイルに書き込まれます。

adwork<number>.log ファイル（adwork001.log, adwork002.log...）は、UNIX の場合、\$APPL_TOP/admin/<SID>/log ディレクトリに配置されます。<SID> は ORACLE_SID または TWO_TASK 変数の値を示します。Windows の場合は、%APPL_TOP%\admin\<SID>.log に配置されます。<SID> は ORACLE_SID または LOCAL の値を示します。

AutoPatch および AD Administration によって実行されるコンカレント要求では、それぞれ独自のログ・ファイルが作成されます。

追加情報： 『Oracle Applications システム管理者ガイド - 構成』のログ・ファイル名と出力ファイル名に関する説明を参照してください。

ワーカー再起動ファイル

再起動ファイルを使用して、停止したところから処理を継続します。また、各ワーカーには、adworkxxx.rf9 と呼ばれる再起動ファイルを指定できます。これらのファイルは、\$APPL_TOP/admin/<SID>/restart (UNIX の場合) または %APPL_TOP%\admin\<SID> \restart (Windows の場合) に格納されます。ワーカーは、マネージャによってジョブが割り当てられると、再起動ファイルを作成し、そのジョブを終了すると再起動ファイルを削除します。

注意： マネージャまたはワーカーの再起動ファイルは、Oracle サポート・サービスから特に指示された場合以外は、変更または削除しないでください。

追加情報： ユーティリティ実行時の様々なエラー状況とその解決方法は、『Oracle Applications メンテナンス・プロシージャ』の「トラブルシューティング」を参照してください。

データ操作言語 (DML) に対するパラレル・サポート

索引作成時の停止時間を短縮するには、AD ユーティリティの parallel_index_threshold 引数をデフォルト値の 20,000 に設定します。これは、表内のブロック数が 20,000 未満の場合、AD ユーティリティでは、パラレル・ワーカーとシリアル DML を使用して索引が作成されることを意味します (以前のリリースと同様)。表内のブロック数が 20,000 以上の場合、索引は 1 つのワーカーとパラレル DML のみを使用して作成されます。このしきい値は、parallel_index_threshold 引数を AD ユーティリティ・コマンドラインに指定することで調整できます。

パラレル処理のモニタリングと制御

パラレル処理を使用する AD セッションは、ユーザーの操作なしで完了まで実行できます。ただし、完了したジョブの数や処理が何かの理由で停止したかどうかを確認すると役立つ場合があります。AD Controller を使用すると、AD Administration または AutoPatch の各ワーカーのステータスを確認し、その動作を制御できます。AD Controller は、対話型または非対話型で実行できます。

追加情報： 1-6 ページの「対話型と非対話型の処理」を参照してください。

ワーカー・ステータスの表示、ワーカーの再起動およびマネージャへのコマンドの発行に関する各オプションは、AD Controller のメイン・メニューから選択します。

注意： このユーティリティは、AD Administration または AutoPatch と同じウィンドウではなく、専用のウィンドウで実行してください。

AD Controller の対話型での実行

AD Controller にアクセスするには、次のステップを実行してください。

1. applmgr でログインし、「環境の設定」の説明に従って環境を設定します。
2. adctrl コマンドで AD Controller を起動します。

次の操作を指示するプロンプトが表示されます。

- APPL_TOP の値を確認します。
- AD Controller のログ・ファイル (デフォルトは adctrl.log) を指定します。AD Controller のログ・ファイルは、現行の作業ディレクトリに書き込まれます。
- Oracle Application Object Library のユーザー名とパスワードを指定します。

3. メイン・メニューからオプションを選択します。

メイン・メニューは、プロンプトに回答すると表示されます。

```

-----
AD Controller Menu
-----
1. Show worker status
2. Tell worker to restart a failed job
3. Tell worker to quit
4. Tell manager that a worker failed its job
5. Tell manager that a worker acknowledges quit
6. Restart a worker on the current machine
7. Exit

Enter your choice [1] : █
    
```

番号を入力してオプションを選択します。[Enter] キーを押すと、いつでも AD Controller のメイン・メニューに戻ります。

追加情報： 各メニュー・オプションの使用方法は、『Oracle Applications メンテナンス・プロシージャ』の「トラブルシューティング」を参照してください。

AD Controller の非対話型での実行

デフォルト・ファイルを作成すると、AD Controller をユーザーの操作なしで実行できます。デフォルト・ファイルにより、ファイルの対話型プロンプトで指定した情報が取得されますが、この情報を後で使用すると、AD Controller をユーザーの操作なしで実行できます。デフォルト・ファイルの作成方法と AD Controller の非対話型での実行方法は、AD Administration の場合とほとんど同じです。

追加情報： 『Oracle Applications メンテナンス・プロシージャ』の「非対話型メンテナンスのスケジュール」を参照してください。

AD Administration と同様に、同じデフォルト・ファイルを使用して異なる AD Controller を実行できます。様々なメニュー・オプションに対するすべての選択肢を、1つのファイルに含めることができます。デフォルト・ファイルで実行するタスクを選択するには、ユーティリティの起動コマンドに `menu_option= <menu choice>` を追加します。この追加によって、デフォルト・ファイルに最初に格納されたメニュー固有のキーストローク情報が上書きされ、任意の AD Controller メニュー項目に対してデフォルト・ファイルを使用できるようになります。また、デフォルト・ファイルに指定したメニュー・オプションは、今後のリリースでメニュー項目が再番号付けまたは再配置された場合でも、常に有効であることが保証されます。

次の表に、使用可能なオプションを示します。

注意： AD Administration の実行に関するメニュー・オプションのリストは、第 4 章の「非対話型処理の準備」にあります。

メニュー・オプション	対応する選択メニュー
ACKNOWLEDGE_QUIT	ワーカーによる停止の確認をマネージャに通知します。
INFORM_FAILURE	ワーカーのジョブが異常終了したことをマネージャに通知します。
RESTART_JOB	異常終了したジョブの再起動をワーカーに指示します。
SHOW_STATUS	ワーカーのステータスを表示します。
SHUTDOWN_WORKER	ワーカーに停止を指示します。
START_WORKER	現在のマシンでワーカーを再起動します。

次に、AD Controller を非対話型で実行してワーカーのステータスを表示する例を示します。

```
$ adctrl interactive=n defaults_file=$APPL_TOP/admin/prod/ctrldefs.txt ¥
logfile=adctr.log menu_option=SHOW_STATUS
```

注意： コマンドラインで、SHOW_STATUS 以外のメニュー・オプションを使用するには、worker_range=<range> オプションも使用する必要があります。詳細は、AD Controller コマンドラインのヘルプを参照してください。

複数ノードへの処理タスクの分散

AD では、パラレル処理で使用する既存のマネージャ / ワーカー・ジョブ・システムを、分散 AD を含めるために拡張しました。このパラレル処理機能を使用すると、複数のアプリケーション層サーバーで開始する同一 AD セッション内のワーカーは、使用可能なすべてのリソースを利用できるようになります。AD ワーカーは、データベース・オブジェクトの他に、ファイル・システム・オブジェクトも作成および更新するため、分散 AD は、共有アプリケーション層ファイル・システムを使用しているシステムでのみ使用する必要があります。これによって、複数のファイルが中央の 1 箇所で作成されることが確認されます。

AD Administration または AutoPatch を主ノードで実行する間に、AD Controller セッションを共有アプリケーション層ファイル・システム環境内の任意のノードから開始し、ローカルと非ローカルの両方のワーカーを使用して、標準の AD Controller 操作を実行します。

追加情報： 『Oracle Applications メンテナンス・プロシージャ』の「処理タスクの分散」を参照してください。

OAM Web ベース・ユーティリティ

Oracle Applications Manager (OAM) は Web ベースの管理ツールであり、このツールを使用すると、以前はコマンドラインでのみ使用可能だった多数のメンテナンス・ユーティリティを使用およびアクセスできます。また、システム固有の情報を迅速に取得して、GUI 形式で表示できます。OAM 内の各ユーティリティには、メイン・ページからアクセスします。このページには、複数レイヤーの詳細へのリンクが含まれています。これによって、ユーザーはあるゆるシステム・データに迅速にアクセスできます。たとえば、パッチ・ウィザード・ユーティリティを使用すると、ダウンロードした推奨パッチのリストにアクセスしたり、そのパッチのいずれかまたはすべてを適用した場合のファイル・システムに与える影響を表示できます。

特定の検索基準に基づいた結果のレポートに加え、多数の OAM ユーティリティを使用して、システム構成に対する変更内容を入力および保存できます。たとえば、ライセンス・マネージャを使用すると、最初のインストールでは無効であった製品を登録できます。また、AutoConfig では、現在の構成パラメータを表示して既存の値を変更できます。

追加情報：『Oracle Applications 概要』の「Oracle Applications Manager」を参照してください。

共通の OAM 操作

OAM の複数の Web ベース・ユーティリティは、同じルック・アンド・フィールを使用して設計されており、統一されたナビゲーション・ツールやドリルダウン・メニューなど、共通の操作を広範に使用しています。たとえば、すべてのページに、OAM ヘルプ・ディレクトリを開く「Help」ボタンがあります。

さらに、OAM ユーティリティには強力な検索機能があり、検索を開始したページに検索結果が直接表示されます。レポートするために、ログ・ファイルを確認したり、ファイル・ディレクトリを点検する必要はありません。たとえば、Applied Patches ユーティリティを使用すると、システムに適用されたすべてのパッチを簡単に検索できます。OAM では、「Simple Search」ページの下部に結果が表示されます。

この項では、最も共通して使用される OAM 操作のいくつかを説明します。

「Applications Dashboard」タブと「Site Map」タブ

OAM のメインとなるページは「Applications Dashboard」と呼ばれます。このページには、使用している Oracle Applications システムの「スナップショット」が用意されています。「Applications Dashboard」からは、OAM のユーティリティと機能にすばやくジャンプできます。これには、「Navigate To」ドロップダウン・リストからジャンプする方法と「Site Map」をクリックしてジャンプする方法があります。

「Applications Dashboard」と「Site Map」は両方とも、タブ形式を使用しています。それぞれのタブは、OAM の他の部分へのリンクとなっています。このタブをクリックすると、機能のサブセットが表示されます。たとえば、「Site Map」で「Maintenance」タブをクリックして、パッチ機能とユーティリティ機能にアクセスします。

ページ・ナビゲーション

各ページにナビゲーション・オプションがあり、該当する場合は、関連する機能へのリンクを提供するドロップダウン・リストが表示されます。長い項目リストがあるページでは、アクセスしやすくするためそのサブセットが OAM によって表示されます。

OAM のインタフェース

「Oracle Applications Manager Dashboard」には、システムの一般的なステータスの概要が表示されます。「Site Map」では、OAM フレームワーク内のユーティリティと機能に対するアクセスが提供されます。

システム・ステータスの確認

アクセス方法に関係なく、OAM で最初に表示されるのは「Applications Dashboard」です。

The screenshot displays the Oracle Applications Manager dashboard. At the top, there is a navigation bar with 'Support Cart', 'Setup', 'Home', 'Logout', and 'Help'. Below this, the 'Applications Dashboard' is shown for 'atg12x12'. A 'Navigate to' dropdown menu is set to 'Application Services'. The main content area is divided into several sections:

- Applications System Status:** Shows data retrieved on 19.09.2006 15:51:51. A table lists components: Host (AP6274RT), Platform (LINUX Intel), Host Status (green check), Admin (green check), Database (green check), Concurrent Processing (red X), Forms (green check), and Web (green check).
- Configuration Changes (last 24 hours):** Shows data retrieved on 19.09.2006 15:51:52. A table lists: Patches Applied (0), Site Level Profile Options (4), and Applications Context Files Edited (1).
- System Alerts:** Shows data retrieved on 19.09.2006 15:51:52. A table lists: New Alerts (65), New Occurrences (265), Open Alerts (0), and Open Occurrences (0).
- Web Components Status:** Shows data retrieved on 06.04.0021 00:00:00. A table lists: PL/SQL Agent (Up), Servlet Agent (Up), JSP Agent (Up), Discoverer (Unmonitored), Personal Home Page (Up), and TCF (Up).
- User Initiated Alerts:** Shows data retrieved on 19.09.2006 15:51:52. A table lists: New Alerts (1), New Occurrences (2), Open Alerts (0), and Open Occurrences (0).

A tip at the bottom states: 'TIP The information shown above (with the exception of Web Components Status section) is retrieved from the system periodically. To retrieve up-to-the-minute data, please use the refresh icon for the desired section. Please see Help for more details.'

「Applications Dashboard」は、HTML コンソールとしての機能を果たし、システム管理者は、一般的なシステム・アクティビティに関する情報を表示できます。システム管理者は、データベースのステータス、コンカレント・マネージャとその他のサービス、コンカレント要求および Oracle Workflow プロセスをチェックする他に、初期化パラメータやプロファイル・オプションなどの構成情報を表示できます。

「Applications Dashboard」は、Oracle Applications Manager へのゲートウェイとして様々な方法で使用されます（その多くは、このマニュアルでは説明しません）。

追加情報：『Oracle Applications 概要』の「Oracle Applications Manager」を参照してください。『Oracle Applications システム管理者ガイド - 構成』も参照してください。

メンテナンス・ユーティリティへのアクセス

「Applications Dashboard」は、すべての Web ベース・メンテナンス・ユーティリティへのゲートウェイです。

The screenshot shows the Oracle Applications Manager interface. The top navigation bar includes 'Support Cart', 'Setup', 'Home', 'Logout', and 'Help'. The main content area is titled 'Applications Dashboard: atg12x12'. A dropdown menu is open over the 'Software Updates' tab, listing various utility options. The 'Patch Wizard' option is selected and highlighted. Below the menu, there are three data tables: 'Application Tier Hosts', 'Database Instances', and 'Activity'.

Host Name	Database Sessions	Running Requests	Forms Sessions	Service Proc
AP6274RT	165	1	2	38
Total	165	1	2	38

Instance Name	Database Sessions	Running Requests	Forms Sessions
atg12x12	170	1	2
Total	170	1	2

Activity	Count
Services Up	24
Services down	1
Unsent Workflow E-Mail	147

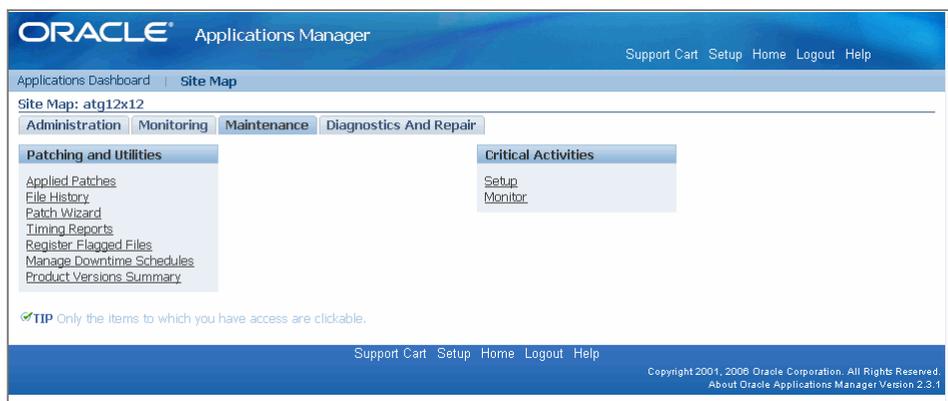
リストを開いて選択し、「Go」をクリックします。OAM 内のすべてのユーティリティと機能の完全なリストについては、「Site Map」タブをクリックしてください。

The screenshot shows the 'Site Map' page in Oracle Applications Manager. The page is organized into several columns of utility links. The 'Administration' tab is selected. The categories and their sub-items are as follows:

- System Configuration:** Hosts, AutoConfig, License Manager.
- Application Services:** Generic Services, Request Processing Managers, Transaction Managers, Parallel Concurrent Programming Setup.
- Workflow:** Home, Work Item Metrics, Agent Activity, Background Engines, Notification Mailer, Service Components, Purge.
- Concurrent Requests:** Submit New, Pending, Running, Completed (Last Hour).
- Service Fulfillment Manager:** Service Fulfillment Manager.
- Others:** Applications Manager Log, Knowledge Base.

A tip at the bottom states: "TIP Only the items to which you have access are clickable." The footer includes copyright information for Oracle Corporation, 2001-2006.

「Site Map」ページには、「Administration」、「Monitoring」、「Maintenance」、「Diagnostics」および「Repair」の各タブが表示されます。それぞれのタブには、一般グループの下にユーティリティと機能へのリンクがあります。たとえば、このページには、「System Configuration」、「Application Services」、「Workflow」などのヘッダーがあります。「Maintenance」タブには「Patching Utilities」や「Critical Activities」などのヘッダーがあります。



ユーティリティのメイン・ページを開くには、ヘッダーの下を検索して該当するリンクをクリックします。たとえば、システムに適用済のパッチに関する情報を表示するには、「Maintenance」タブの「Patching and Utilities」ヘッダーの下にある「Applied Patches」をクリックします。

他の機能にアクセスするには他のタブをクリックします。このガイドでは、OAM Web ベース・ユーティリティへのアクセス方法の説明は、すべて「Site Map」から開始します。

OAM へのアクセス

次の URL を使用して、OAM にアクセスします。

`http:// <HTTP hostname>.<domain>:<HTTP port>OA_HTML/AppsLogin`

「Welcome」ページが表示されます。



ユーザー名とパスワードを入力して、「Login」をクリックします。OAM の「Applications Dashboard」が表示されます。「Applications Dashboard」からは、「Navigate to:」メニューに表示されているユーティリティの 1 つにすばやくジャンプしたり、「Site Map」ページに移動してユーティリティのリストを表示できます。

インストールおよびアップグレード

この章では、新規の Oracle Applications システムのインストールに使用するユーティリティ、および既存のシステムの新規リリース・バージョンへのアップグレードに使用するユーティリティについて説明します。この章には次の項があります。

- [インストールおよびアップグレード](#)
- [Rapid Install](#)
- [AutoPatch](#)

インストールおよびアップグレード

この項では、インストールとアップグレードの処理について簡単に説明します。また、Rapid Install の主な機能の概要を説明します。Rapid Install は新規の Oracle Applications システムのインストールに使用するコマンドライン・ユーティリティです。インストール・ユーティリティに加え、Rapid Install も既存システムから新規リリース・レベルにアップグレードするためにシステムを設定および構成するユーティリティの 1 つです。

インストール

Oracle Applications システムは Rapid Install を使用してインストールします。Rapid Install は、新規の完全に構成されたシステムをインストールします。構成されたシステムには、一連の Oracle Applications 製品、動作保証されたデータベース層およびアプリケーション層のテクノロジー・スタック、すべてのパッチ、Minipack、Family Pack およびソフトウェアのリリース時点で使用可能な他の更新が含まれます。

テクノロジー・スタックは新規システムの実行に必要とされる（データベース層とアプリケーション層にそれぞれ固有の）コンポーネントで構成されています。たとえば、新規インストールには、特定の Oracle Applications バージョンで動作保証された新規データベース（およびそれに関連する Oracle ホーム）、およびアプリケーション層の最新コンポーネントが含まれます。

ライセンスを取得したステータスにかかわらず、全製品がインストールされます。インストール中に、ライセンスを取得している製品にフラグを付け、それらの製品がシステムでアクティブとなるように登録する機会があります。この処理によって、それらの製品が、初期インストール後にシステムを更新およびメンテナンスするために必要なパッチ適用などのタスクの対象となります。

追加情報： インストール処理および Rapid Install ウィザードの詳細は、『Oracle Applications インストレーション・ガイド: Rapid Install の使用方法』に記載されています。

アップグレード

アップグレードの一環として、Rapid Install ウィザードに構成パラメータを入力し、Rapid Install をアップグレード前の準備ステップの 1 つとして実行します。Rapid Install はこれらのパラメータを使用してファイル・システムを設定し、新規データベース層およびアプリケーション層のテクノロジー・スタックをインストールします。アップグレード前タスクの 1 つとして、既存データベースを Oracle 10g に移行またはアップグレードします。

さらに、アップグレード処理の様々な時点で AutoPatch を使用してアップグレード関連パッチを適用し、アップグレード・ドライバを実行して Oracle Applications システムを完全リリース・レベルにします。

追加情報： アップグレード処理は『Oracle Applications リリース 11i から 12 へのアップグレード・ガイド』に詳しく説明されています。AutoPatch には、アップグレード処理の範囲を超える機能があります。詳細は、『Oracle Applications パッチ・プロシージャ』を参照してください。

Rapid Install

Rapid Install を使用して、次のタスクを実行できます。

- 新規の完全に構成された Oracle Applications システムをインストールします。構成されたシステムには、動作保証された最新の Oracle Applications テクノロジ・スタック、すべてのパッチ、Minipack、Family Pack およびこのリリース時点で使用可能な他の更新が含まれます。
- ファイル・システムを設定し、アップグレードしたシステム用にサーバー・プロセスを構成します。
- 新規データベース層およびアプリケーション層のテクノロジ・スタックをインストールします。

Rapid Install では、ウィザード画面を使用して、選択した各タスクを実行します。ウィザード画面に、システムの構成値を入力します。入力した値は、通常、後で使用するためにアプリケーション・データベースに保存されます。

注意： Oracle Applications の旧リリースでは、テキスト・ファイル (config.txt) を使用して、入力した構成値を保存していました。リリース 12 では、このファイルは、データベースがまだ作成されていない場合に再起動をサポートするためにのみ使用します。

Rapid Install を再度実行すると、通常、保存された情報が示されるため、これらの情報を Oracle Applications ファイル・システムの作成、最新データベースのインストール、製品の登録、NLS 要件の管理、ポート接続の構成、データベースおよびリスナーの起動および停止スクリプトの作成および実行などの操作に使用できます。

構成情報を保存することにより、Rapid Install ウィザードを実行するたびにシステム構成情報を入力しなくても、分散インストール (複数のマシンでの処理の繰り返し) を実行できます。構成情報の詳細を保存すると、情報を 1 回入力するだけで、同じシステム構成を使用して必要なすべてのマシンのインストールを実行できます。

Rapid Install で使用される主な構成エンジンは、AutoConfig と呼ばれます。Rapid Install から AutoConfig に提供された構成情報は、各ノードのコンテキスト・ファイルと呼ばれるノード固有の構成ファイルに保存されます。

また、AutoConfig によって、システム構成の管理が簡易化および標準化されます。初期インストール後、いつでも Oracle Applications Manager (OAM) の構成エディタを使用して各種システム設定を更新し、AutoConfig スクリプトを実行してシステム構成ファイルに新しい値を入力できます。

追加情報： 『Oracle Applications 概要』の AutoConfig に関する説明を参照してください。

新規システムのインストール

Rapid Install によって、システムに必要な多くのパラメータに自動的に値が指定されます。ただし、最初に、独自のパラメータに値を指定して「Standard」インストールを実行するか、「Express」インストールを選択して Rapid Install でほとんどすべてのパラメータにデフォルト値を指定するかを選択できます。

「Standard」インストールでは、サイトの特定要件にあわせてより柔軟にシステムを構成できます。一方、「Express」インストールは、デフォルト設定で十分なことがわかっている場合、または設定が問題にならないテスト・システムを設定する場合に便利です。

どちらのタイプも、新規データベースをインストールするか、または Vision Demo データベースをインストールするかを選択できます。新規データベースは完全に構成されますが、取引データは含まれません。Vision Demo データベースには架空の会社のサンプル取引データが含まれ、研修やデモンストレーションに使用できます。

インストール方針および用語

Oracle Applications リリース 12 のインストール処理により、グリッドスタイル環境のニーズを満たすための展開が開始されます。終了時には、処理は合理化され、旧リリースに比べて必要な画面や意思決定が少なくなっています。最初は基本システムから始めて、成長または他の配置ニーズにあわせてマシンを追加していくことが一般的になっています。

Rapid Install を使用する場合、次の用語をよく理解しておく必要があります。

- サーバーは、特定の機能を提供するプロセスまたはプロセス・グループで、一般にサービスと呼ばれます。たとえば、HTTP サーバーは HTTP 要求をリスニングして処理するプロセスです。
- ノードはサーバーを論理的にグループ化したものであるため、本質的にはハードウェアの概念というよりはむしろソフトウェアの概念ですが、全ノードが単一マシンに配置されている場合（通常の場合）はマシンを指すために使用できます。たとえば、アプリケーション・ノードは特定の構成、ノード・ファイル・システム、インスタンス・ファイル・システムの組合せであり、これらが連携してアプリケーション・ノードとして動作するために必要なサービスをサポートします。
- 層はサービスを論理的にグループ化したもので、複数の物理マシンに分布することがあります。Oracle Applications インストールはデータベース層（データベースのサポートおよび管理）、アプリケーション層（各種アプリケーション・コンポーネントをサポートおよび管理し、中間層とも呼ばれる）、デスクトップ層（アドオン・コンポーネントによって標準 Web ブラウザにユーザー・インタフェースを提供）の 3 層アーキテクチャで構成されています。

追加情報： リリース 12 の Applications アーキテクチャの詳細は、『Oracle Applications 概要』を参照してください。

分散インストール

Rapid Install による分散（複数ノード）システムのインストールには、共有アプリケーション・ノードのファイル・システムの設定およびロード・バランシングのための準備が含まれます。

同一オペレーティング・システムを実行するノードのデフォルトとして、Rapid Install は APPL_TOP および COMMON_TOP ファイル・システムのみでなく、アプリケーション・ノード・テクノロジ・スタックも共有するシステムを作成します。フォームまたは Web ページ、あるいはコンカレント処理などの標準サービスを提供するすべてのアプリケーション・ノードから使用できるように、すべてのアプリケーション・ノード・ファイルは、各アプリケーション・ノード・マシンからマウントされた単一の共有ディスク・リソースにインストールされます。ロード・バランシングでは、処理および通信アクティビティをネットワーク全体に均等に分散し、過負荷となるマシンがないようにします。

リリース 11i システムからリリース 12 へのアップグレード

リリース 11i からリリース 12 へのアップグレードの一環として、Rapid Install ウィザードに構成パラメータを入力し、Rapid Install をアップグレード前タスクの 1 つとして実行します。Rapid Install ではこれらのパラメータを使用してファイル・システムを設定し、新規テクノロジー・スタックをインストールします。アップグレード前タスクの 1 つとして、既存データベースをこのリリースで動作保証されたバージョンに移行またはアップグレードします。

アップグレード前タスクの終了後、AutoPatch を実行してパッチを適用し、製品およびデータベースを最新リリース・レベルにアップグレードするドライバを実行します。次に、Rapid Install の 2 回目の実行を行い、サーバーおよびサービスを構成および起動します。

追加情報： アップグレード情報の詳細は、『Oracle Applications リリース 11i から 12 へのアップグレード・ガイド』を参照してください。

新規テクノロジー・スタックのインストール

Rapid Install ウィザードを実行してテクノロジー・スタック・コンポーネントのみをインストールすることで、既存のデータベース層またはアプリケーション層ノードを新規テクノロジー・スタック (techstack) にアップグレードできます。関連する新規 ORACLE_HOME の作成に加え、この処理では AutoConfig を使用して、更新されたテクノロジー・スタックで使用する新規構成ファイルを生成します。

追加情報： 新規テクノロジー・スタックは、製品をアップグレードしなくてもインストールできます。詳細は、『Oracle Applications インストール・ガイド : Rapid Install の使用方法』を参照してください。

Rapid Install のインタフェース

Rapid Install はコマンドラインから起動します。ただし、その処理操作は第 1 章の「AD コマンドライン・ユーティリティ」で説明した内容とは異なります。Rapid Install では、Rapid Install ウィザードという Java ベースの画面フローが表示され、構成パラメータ値を収集する処理をステップごとに進める一連の画面が提供されます。

使用する画面フローを指定します。ウィザードにその処理のデフォルト構成値が表示されます。テキスト入力ボックスとドロップダウン・リストの組合せを使用して、デフォルトをそのまま使用するか、選択した操作タイプに基づいて新しい値を入力します。

入力フィールドおよびドロップダウン・リスト

Rapid Install のインタフェースでは、入力フィールドおよびドロップダウン・リストで次の処理を実行できます。

- 入力フィールドに値を入力するか、表示されたデフォルト値をそのまま使用します (灰色表示されていない場合)。
- 入力ボックスに直接情報を入力するか、ドロップダウン・メニューのあるフィールドの有効オプション・リストから情報を選択します。
- 入力フィールドのすべての有効オプションを表示します (ドロップダウン・リストに)。オプションをクリックして選択します。
- ドロップダウン・リストのオプションを置き換えます。コンボ・ボックス内に有効なオプションを入力することで、リストのオプションを置き換えることができます。このタイプの入力を使用可能な場合は、テキストに記載されています。

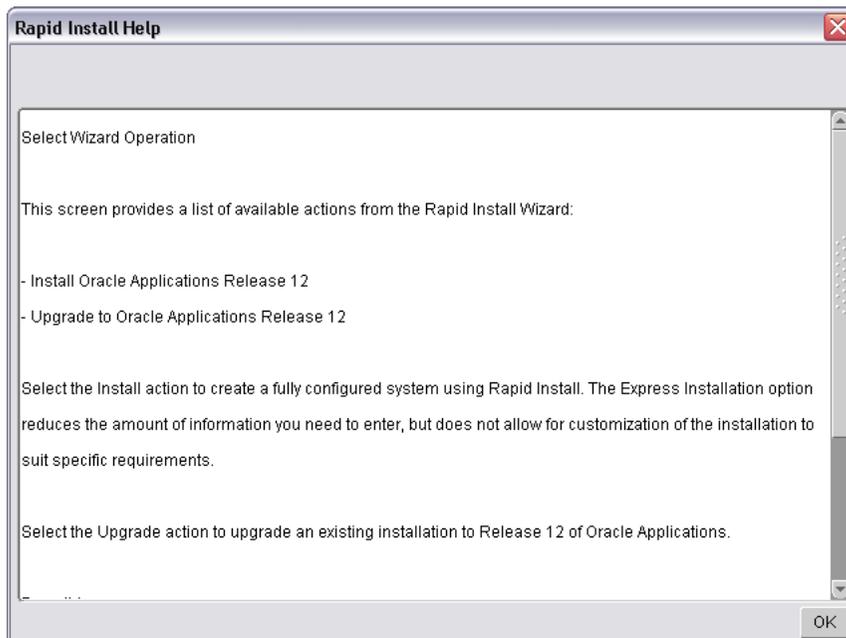
ボタンおよびキー

Rapid Install のインタフェースでは、ボタンとキーで次の処理を実行できます。

- 該当するラジオ・ボタンをクリックして、相互排他的なオプションを選択します。
- オプション間を移動します ([Tab] キー、上矢印または下矢印キーを使用)。
- Rapid Install 処理を取り消すか、前画面または次画面に移動します。
- 非表示フィールドを表示します (垂直または水平スクロール・バーを使用)。

ヘルプ

ほとんどの画面には、個別フィールドにヘルプがあり、フィールド上にマウスを置くと小さいテキスト・ボックスに情報の説明が表示されます。ほとんどの画面には「Help」ボタンも表示されます。ボタンをクリックすると、画面レベルのヘルプ (画面の一般的な説明) および入力フィールドの概要が表示されます。次に画面レベルのヘルプの例を示します。



Rapid Install の実行

この項では、基本的な起動操作のみを説明します。Rapid Install の詳細は、『Oracle Applications インストール・ガイド: Rapid Install の使用方法』を参照してください。

1. オペレーティング・システム・アカウントを作成します。

データベース・ノードおよびアプリケーション・ノードのファイル・システムのインストーラに使用するオペレーティング・システム・アカウントを作成します。

2. 他の設定タスクを実行します。

指示に従って、追加ソフトウェアのインストールなど他の設定タスクを実行します。プラットフォームが UNIX または Windows でない場合、(お使いのプラットフォームの)『Oracle Applications インストールおよびアップグレード・ノート』で追加要件を参照してください。

3. ステージ領域を設定します。

Rapid Install 実行の準備として、Perl スクリプトを実行する必要があります。これにより、インストール・ディレクトリが作成され、ソフトウェア・バンドルのコンテンツがファイル・システムの適切な場所にコピーされます。

4. 次のコマンドを使用して、Rapid Install を起動します。

UNIX:

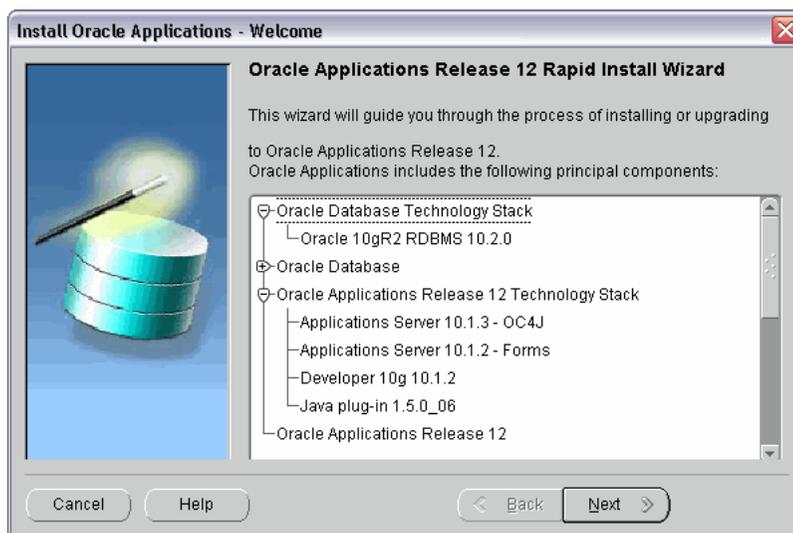
```
$ cd /u01/Stage12/startCD/Disk1/rapidwiz
$ ./rapidwiz
```

Windows:

```
C:\>f:
F:\>cd Stage12\startCD\Disk1\rapidwiz
F:\Stage12\startCD\Disk1\rapidwiz> rapidwiz.cmd
```

5. インストールされたコンポーネントを確認します。

Rapid Install により、「Welcome」画面にリリース 12 でインストールされるコンポーネントが表示されます。



操作は必要ありません。「Next」をクリックして次に進みます。

6. 画面フローを選択します。

「Wizard Operation」画面で画面フローを選択します。たとえば、「Standard」インストールを実行する場合は「Install Oracle Applications Release 12」をクリックします。



アップグレードを実行する場合は、「Upgrade to Oracle Applications Release 12」をクリックします。



「Next」をクリックします。ウィザードにより該当する画面フローが続きます。

7. ウィザード画面を完了します。

残りのウィザード画面で、インストールまたはアップグレードの完了に必要なパラメータを要求するプロンプトが表示されます。ウィザードの完了後、作業環境の作成に必要なパラメータがすべて存在するかどうかを検証され、システムの設定が開始されます。

AutoPatch

AutoPatch は、Oracle Applications のファイル・システムまたはデータベースにパッチを適用するために使用します。AutoPatch は、一連のプロンプトを介してシステムに必要な情報を収集します。ユーザーがプロンプトへの入力を完了すると、AutoPatch は、パッチの適用に必要なすべてのタスクを実行します。タスクの例を次に挙げます。

注意： この項では、この重要なツールに関する基本情報を説明します。パッチ適用処理および AutoPatch の詳細は、単一ソース『Oracle Applications パッチ・プロシージャ』に統合されています。

- パッチ・メタデータがアンロードされます。
- パッチ情報が以前のパッチ・セッションからデータベースにアップロードされます（必要な場合）。
- パッチ・ドライバ・ファイルが読み取られて検証され、製品ドライバ・ファイルが読み取られます。
- 製品ライブラリのオブジェクト・モジュールのバージョン番号と、パッチ・ファイルに対する既存のファイルのバージョン番号が比較されます。
- パッチによって変更される既存のファイルすべてがバックアップされます。
- ファイルがコピーされます。
- ファイルがライブラリにアーカイブされます。
- 実行可能プログラムが再リンクされます。
- フォーム、レポート、メッセージ、グラフィックスおよび Java アーカイブ (JAR) ファイルが生成されます。

- JSP ファイルと無効なデータベース・オブジェクトがコンパイルされます。
- データベース・オブジェクトが更新されます。
- パッチによってテンプレート・ファイルが導入または更新された場合、AutoConfig の実行によって構成ファイルが更新されます。
- パッチ情報がデータベースに保存され、他のパッチ・ツールからアクセスできるようになります。

AutoPatch のインタフェース

AutoPatch はコマンドラインから実行します。情報は、入力画面ではなくプロンプトに依存します。

AutoPatch の実行

AutoPatch を実行する前に、環境の設定、サービスのシャット・ダウン、メンテナンス・モードの有効化などいくつかの準備タスクを実行する必要があります。

次のコマンドで AutoPatch を起動します。

```
$ adpatch
```

起動コマンドに修飾子を追加することで、AutoPatch の操作方法を制御できます。修飾子は、引数またはオプションの形式で指定できます。この修飾子によって AutoPatch が実行する処理が調整されます。たとえば、*driver=<driver file name>* オプションを追加することで、AutoPatch にドライバ・ファイル名を示すことができます。

また、*options=* 引数を追加して、AutoPatch に汎用的なオプションを渡すこともできます。たとえば、*options=nocopyportion* によって、AutoPatch にドライバのコピー部分を実行しないことを通知します。引数またはオプションはそれぞれカンマで区切ります。

追加情報： すべての AD ユーティリティの実行に関する一般的な手順については、このガイドの第 1 章「AD ユーティリティの実行」を参照してください。AutoPatch に固有の手順については、『Oracle Applications パッチ・プロシージャ』の「AutoPatch の実行」も参照してください。

他のパッチ・ツール

パッチ処理に関連するその他のユーティリティは次のとおりです。

- AD Merge Patch では、パッチの適用に必要なタスクと処理が 1 回の操作で実行されるように、複数のパッチを 1 つのパッチにマージします。
- Patch Wizard を使用すると、システムには適用されていないが、システムを最新の状態に保つために推奨されているパッチを判別できます。
- Applied Patches により、パッチ履歴データベースでシステムに適用済のパッチ・リストを検索できます。
- File History により、パッチの影響を受けた全ファイルの変更履歴を表示できます。
- Timing Reports により、パッチ・ジョブの実行をモニターできます。
- Registered Flagged Files は、パッチの適用により影響を受けたファイルへのカスタマイズを追跡します。
- Software Updates により、システムのすべてのパッチ関連情報の概要が提供されます。

これらのユーティリティの詳細は、『Oracle Applications パッチ・プロシージャ』を参照してください。

システムの設定と構成は、インストールまたはアップグレード時にその処理の一環として指定した値に基づいて実行されます。インストールまたはアップグレード後の様々な時点で、システムの再構成が必要になる場合があります。このタスクを支援するために、Oracle Applications では複数のユーティリティが使用されます。この章では、ユーティリティの構成に関する次の内容について説明します。

- システム構成
- AD Splicer
- File Character Set Converter

システム構成

新規のインストールまたは既存のシステムのアップグレード時にはシステムの構成を定義します。定義するには、製品および言語を登録し、データベース名、最上位ディレクトリとマウント・ポイント、製品と国固有の機能、NLS 設定、グローバル・ネットワーク設定などの情報を指定します。これらの値は、個々のシステム構成ファイルに伝播され、コンテキストと呼ばれる中央のリポジトリ・ファイルにも格納されます。

システム構成は、構成情報をレポートおよび管理するように設計されたユーティリティの 1 つを使用することで必要に応じて変更できます。コマンドラインからアクセスするユーティリティと、Web ベースのユーティリティがあります。

Web ベースの構成ユーティリティ

次のユーティリティは Web ベースです。これらのレポート・ツールは、Oracle Applications Manager (OAM) を介してアクセスします。

AutoConfig

システム構成パラメータは、AutoConfig によって格納および管理されます。Rapid Install の主要構成エンジンによって AutoConfig に構成情報が入力され、各システム・ノードの構成がコンテキスト・ファイルと呼ばれるノード固有の構成ファイルに保存されます。

Rapid Install 操作の AutoConfig を単独で使用し、システムを定義する個々の構成パラメータを表示して編集することもできます。初期インストール後は、いつでも Oracle Applications Manager の構成エディタを使用して各種システム設定を更新できます。

追加情報：『Oracle Applications 概要』の AutoConfig に関する説明を参照してください。

ライセンス・マネージャ

最初のインストール後は、ライセンス取得または使用開始する製品、国固有の機能（ローカライズ済製品）および言語をアクティブとして登録し、様々なシステム・メンテナンス・タスクの対象にする必要があります。ライセンス・マネージャを使用すると、現在登録されている製品に関するレポートを作成したり、追加の製品、国固有の機能（ローカライズ済製品）を登録できます。

追加情報：『Oracle Applications システム管理者ガイド - メンテナンス』の「ライセンス・マネージャ」を参照してください。

コマンドラインから実行する構成ユーティリティ

次の AD ユーティリティはコマンドラインから実行します。これらのユーティリティの詳細は、この章の後半で説明します。

AD Splicer

スプライス化は、基本リリースに含まれなかった製品を既存システム内の製品に追加する処理です。AD Splicer は、追加した製品が有効な製品として AutoPatch と AD Administration で認識されるように、APPL_TOP およびデータベースを変更します。

追加情報： この章の「AD Splicer」を参照してください。

File Character Set Converter

このユーティリティでは、AD Administration、AutoPatch または Rapid Install によって実行される処理に含まれない個々のファイルのキャラクタ・セットを、システムで使用するキャラクタ・セットに変換します。

追加情報： この章の「File Character Set Converter」を参照してください。

AD Splicer

AD Splicer は、ライセンス・マネージャと同じ製品登録機能を実行します。ただし、メンテナンス・パック間でリリースされたオフサイクル製品がシステムでアクティブとなるように登録します。このサプライズ化処理により、オフサイクル製品が特定のリリースの有効な製品として AutoPatch と AD Administration で認識されるように、APPL_TOP とデータベースが変更されます。

注意： AD Splicer を使用してカスタム製品を追加することはできません。

オフサイクル製品が含まれたパッチには、AD Splicer が製品を登録するために必要な制御ファイルが含まれています。このパッチには、新しい製品のインストール方法が記載された README ファイルも含まれます。

制御ファイル

製品定義ファイルと製品構成ファイルの 2 種類の AD Splicer 制御ファイルがあります。AD Splicer を実行する前に、製品構成ファイルをカスタマイズし、そのファイルと製品定義ファイルを APPL_TOP/admin にコピーする必要があります。

製品定義ファイル

サプライズ化製品ごとに 2 つの製品定義ファイル (<prod>prod.txt と <prod>terr.txt) があり、製品および関連する言語情報が定義されています。これらのファイルは編集しないでください。たとえば、Oracle Sales Analyzer (zsa) の製品定義ファイルは zsaprod.txt と zsater.txt です。

製品構成

newprods.txt ファイルは、サプライズ化製品に対して必要なパラメータを定義するテンプレートとして機能します。次に、Oracle Sales Analyzer (zsa) の製品構成ファイルの例を示します。

```
product=zsa
base_product_top=*APPL_TOP*
oracle_schema=zsa
sizing_factor=100
main_tspace=*Product_Name*D
index_tspace=*Product_Name*X
temp_tspace=*Temporary_Tablespace*
default_tspace=*Product_Name*D
```

このファイルにある、一部のパラメータ値を編集する必要がある場合があります。詳細は、次の表を参照してください。製品構成ファイルの項目の順序を変更しないでください。項目は例に示したとおりに表示される必要があります。

パラメータ	説明
product=	この項目は編集しないでください。製品の略称 <prod> はすでに設定されています。この製品の <prod>prod.txt 制御ファイルおよび <prod>terr.txt 制御ファイルと一致している必要があります。最も内部の参照では <prod> が使用されます。
base_product_top=	製品のファイルが含まれる基本ディレクトリを示します。デフォルト値 *APPL_TOP* は、APPL_TOP 環境が設定されたディレクトリにその製品のファイルが書き込まれることを意味します。製品ファイルを別のディレクトリに書き込む場合は、*APPL_TOP* 値をディレクトリのフルパスに置き換えます。

パラメータ	説明
oracle_schema=	製品のデータベース・オブジェクトが作成される Oracle スキーマを示します。デフォルトの Oracle スキーマは、製品の略称と同じです。製品のデータベース・オブジェクトを別のスキーマに配置する場合は、これを変更します。製品のオブジェクトのあるスキーマから別のスキーマに移動する場合、内部 Oracle Applications 表をエクスポート、インポートおよび更新する必要があるため、最初のスキーマは注意して選択してください。
sizing_factor=	Oracle Applications がこの製品の表と索引を作成するときに使用するサイジング・ファクタを示します。デフォルト値 100 は 100% を意味し、製品の表および索引が Oracle によって決定されたデフォルトのサイズで作成されます。デフォルトのサイジング・ファクタを使用することをお勧めします。

表領域

リリース 12 では Oracle Applications Tablespace Model (OATM) が使用されているため、AD Splicer に表領域を識別するパラメータを指定する必要はありません。

追加情報：『Oracle Applications 概要』の表領域管理に関する説明を参照してください。

AD Splicer のインタフェース

AD Splicer は、コマンドライン・ユーティリティです。メニューや入力画面は使用しません。

AD Splicer の実行

このユーティリティを使用する準備に必要なすべてのステップは、『Oracle Applications メンテナンス・プロシージャ』のオフサイクル製品の追加に関する説明を参照してください。AD Splicer の実行が指示された場合は、次の手順に従います。

ステップ 1 環境の設定

環境を設定して、システムを定義する環境変数を適用する必要があります。このタスクは、多くの AD ユーティリティで共通です。基本的なステップは、第 1 章の「環境の設定」を参照してください。

ステップ 2 AD Splicer の起動

次のコマンドを使用して AD Splicer を起動します。

UNIX:

```
$ cd $APPL_TOP/admin
$ adsplice
```

Windows:

```
C:\> cd %APPL_TOP%\admin
C:\> adsplice
```

AD Splicer は、APPL_TOP とデータベースの各組合せに対して実行する必要があります。これによって、アプリケーション・ユーティリティは、データベースに対して製品が適切にスプライン化されていることを認識します。

File Character Set Converter

File Character Set Converter では、個々のファイルのキャラクタ・セットが別のキャラクタ・セットに（1回に1つずつ）変換されます。このタスクを実行して、Oracle から受け取るテキスト・ファイルをシステムで使用するキャラクタ・セットに変換する必要がある場合があります。変換を必要とする可能性があるファイルには、SQL*Plus スクリプト、PL/SQL スクリプト、ローダー・ファイル、ドライバ・ファイル、ODF ファイル、ヘッダー・ファイル、HTML ファイルなどが含まれます。

通常、AD Administration、AutoPatch および Rapid Install では、必要なすべての Character Set Converter が自動的に実行されるため、このユーティリティを手動で実行する必要はありません。

必須パラメータ

次のパラメータは、変換を実行するために必要です。

パラメータ	定義
source_file	変換する（ソース）ファイルのパスとファイル名。
source_char_set	変換する（ソース）ファイルのキャラクタ・セット。
destination_file	変換された（宛先）ファイルのパスとファイル名。
dest_char_set	変換された（宛先）ファイルのキャラクタ・セット。

File Character Set Converter のインタフェース

File Character Set Converter は、コマンドライン・ユーティリティです。メニューや入力画面は使用しません。

File Character Set Converter の実行

このユーティリティを実行するには、次のステップを完了します。

ステップ1 環境の設定

環境を設定して、システムを定義する環境変数を適用する必要があります。このタスクは、多くの AD ユーティリティで共通です。基本的なステップは、第 1 章の「環境の設定」を参照してください。

ステップ2 ユーティリティの起動

次のコマンドを使用して File Character Set Converter を起動します。

```
adncnv <source_file> <source_char_set> <destination_file> <dest_char_set>
```

ソース・ファイルのディレクトリと APPLTMP ディレクトリが同じファイル・システム上であれば、ソース・ファイルと宛先ファイルのパスとファイル名が同じでもかまいません。一般的には、ソース・ファイル名と宛先ファイル名は別にしたほうが簡単であり、安全です。

注意： 同じファイル名に変換できない場合は、異なるファイル名に変換するか、または APPLTMP をソース・ファイル・ディレクトリと同じファイル・システム上のディレクトリに変更してください。

たとえば、ファイル `afdct.ldt` をキャラクタ・セット `we8iso8859p1` からキャラクタ・セット `utf8` へ変換するには、次のように入力します。

UNIX:

```
$ cd $FND_TOP/patch/115/import/<language>
$ cp afdct.ldt afdct.old
$ adncnv afdct.old we8iso8859p1 afdct.ldt utf8
```

Windows:

```
C:\> cd %FND_TOP%\patch\115\import\<language>
C:\> copy afdct.ldt afdct.old
C:\> adncnv afdct.old we8iso8859p1 afdct.ldt utf8
```

メンテナンス

Oracle Applications システムがスムーズに実行されるようにするには、ルーチン・メンテナンス・タスクを実行する必要があります。この章では、これらのタスクを簡単に実行できるように設計された AD ユーティリティについて説明します。この章には次の項があります。

- システム・メンテナンス
- [AD Administration](#) の概要
- [アプリケーション・ファイルの生成](#)
- [アプリケーション・ファイルのメンテナンス](#)
- [データベース・エンティティのメンテナンス](#)
- [メンテナンス・モードの変更](#)
- [AD Relink](#)

システム・メンテナンス

システムのインストール後、システムがスムーズに実行されるのを維持するため、特定のメンテナンス・タスクを実行する必要があります。たとえば、Forms ファイルの生成、スナップショット情報のメンテナンス、実行可能プログラムの再リンク、APPS スキーマのコンパイルまたは検証などがあります。一部はルーチン・タスクで、定期的に行う必要があります。その他のタスクは、不定期に行われます。

メンテナンス・タスクは、AD Administration を使用してコマンドラインから実行します。このユーティリティを起動すると、タスクがメニュー・フォームで示されます。タスクの大部分は、実行するアクティビティの種類ごとにグループ化されています。たとえば、アプリケーション・データベース・エンティティのコンパイルおよび再ロードに関連するタスクは、同じメニューにグループ化されています。

AD Administration のメンテナンス・タスクに加え、この章では AD Relink についても説明します。AD Relink は、AD 実行可能プログラムの再リンクに使用されるコマンドライン・ユーティリティです。Oracle Applications 製品の実行可能プログラムは AD Administration を使用して再リンクできますが、AD ユーティリティの実行可能プログラムは AD Administration を使用して再リンクすることはできません。このため、コマンドライン・ユーティリティ AD Relink を使用して手動で再リンクする必要があります。

AD Administration の概要

AD Administration では、Oracle Applications システムに必要なほとんどのメンテナンス・タスクが管理されます。現在、これらのメンテナンス・タスクは AD Administration のメイン・メニューでタイプ別にグループ化されています。

コマンドラインから AD Administration を起動すると、管理に必要なシステム固有の基本情報を要求するプロンプトが表示されます。たとえば、処理内容やエラー・メッセージを記録するログ・ファイルの名前を指定する必要があります。

追加情報： [第 1 章の「プロンプト」](#) を参照してください。

これらのプロンプトに対する応答が完了すると、AD Administration のメイン・メニューが表示されます。メイン・メニューは、個々のメンテナンス・タスクを選択する様々なサブメニューのゲートウェイとして機能します。たとえば、「Generating Applications Files」メニューでは、メッセージ・ファイル、Forms ファイル、レポート・ファイル、または製品 JAR ファイルを生成するタスクを実行できます。これらのサブメニュー・タスクでは、タスク固有の情報を収集するプロンプトへの応答が要求される場合もあります。たとえば、一部のタスクでは、タスクに関連付けられているジョブの処理に使用するワーカーの数を入力する必要があります。

追加情報： [第 1 章の「タスクの平行処理」](#) を参照してください。

AD Administration のプロンプトに回答する場合は、ユーティリティを対話型で実行します。ただし、AutoPatch や AD Controller と同様に、AD Administration も非対話型で実行できます。この場合、ユーザー操作なしで特定のメンテナンス・タスクを実行するために必要な情報が含まれている、事前作成済みのデフォルト・ファイルを指定します。

追加情報： [第 1 章の「対話型と非対話型の処理」](#) を参照してください。

プロンプト

[第 1 章](#)で説明した基本的なプロンプトの他に、AD Administration では、各サブメニュー・タスクに固有の追加情報が必要な場合があります。このような場合は、追加のプロンプトが表示されます。たとえば、「Generate Applications Files」メニューから「Generate Product JAR files」タスクを実行すると、AD Administration により次のプロンプトが表示されます。

```
Do you wish to force generation of all jar files? [No]:
```

タスク固有のプロンプトは、各タスクに関する項で詳細に説明します。

非対話型処理の準備

コマンドライン・プロンプトの説明では、AD Administration を対話型で実行していると想定しています。対話型の実行では、標準プロンプト、および AD のメイン・メニューやサブメニューから選択した特定のタスクに必要なプロンプトに応答します。AD Administration の一部のタスクは、デフォルト・ファイルに格納した情報を使用して非対話型で実行することもできますが、この場合はプロンプトへの応答は要求されません。

追加情報： 1-6 ページの「対話型と非対話型の処理」を参照してください。『Oracle Applications メンテナンス・プロシージャ』の「非対話型のメンテナンスのスケジュール」も参照してください。

AD Administration デフォルト・ファイルでのメニュー・オプションの指定

同じデフォルト・ファイルを使用して、AD Administration の様々なタスクを実行できます。つまり、単一のファイルに、様々なメニュー・オプションに対する選択内容をすべて格納できます。デフォルト・ファイルで実行するタスクを選択するには、ユーティリティの起動コマンドに `menu_option= <menu choice>` を追加します。これにより、デフォルト・ファイルに最初に格納されたメニュー固有のキーストローク情報が上書きされ、任意の AD Administration メニュー項目に対してデフォルト・ファイルを使用できるようになります。また、デフォルト・ファイルに指定したメニュー・オプションは、今後のリリースでメニュー項目が再番号付けまたは再配置された場合でも、常に有効であることが保証されます。

次の表に、メニュー・オプションと対応するメニュー・タスクを示します。

メニュー・オプション	対応する AD Administration メニュー項目
GEN_MESSAGES	Generate message files
GEN_FORMS	Generate form files
GEN_REPORTS	Generate reports files
GEN_JARS	Generate product JAR files
RELINK	Relink Applications programs
CREATE_ENV	Create Applications environment file
COPY_FILES	Copy files to destinations
CONVERT_CHARSET	Convert character set
SCAN_APPLTOP	Scan the APPL_TOP for exceptions
SCAN_CUSTOM_DIR	Scan a CUSTOM directory for exceptions
LIST_SNAPSHOT	List snapshots
UPDATE_CURRENT_VIEW	Update current view snapshot
CREATE_SNAPSHOT	Create named snapshot
EXPORT_SNAPSHOT	Export snapshot to file
IMPORT_SNAPSHOT	Import snapshot from file
DELETE_SNAPSHOT	Delete named snapshot
CHECK_FILES	Check for missing files
CMP_INVALID	Compile APPS schema
CMP_MENU	Compile menu information
CMP_FLEXFIELDS	Compile flexfield data in AOL tables

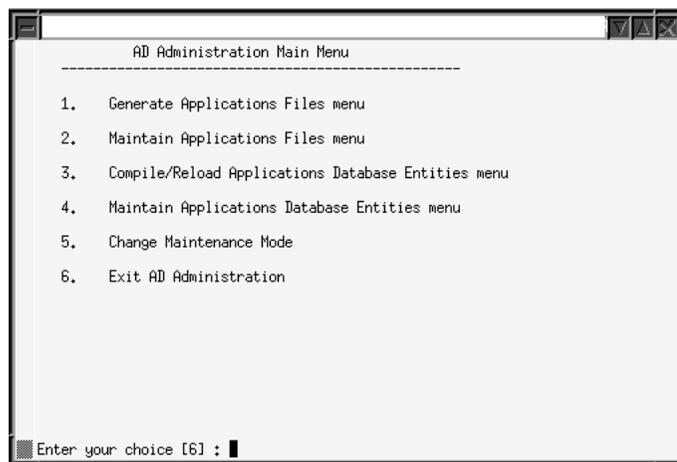
メニュー・オプション	対応する AD Administration メニュー項目
RELOAD_JARS	Reload JAR files to database
VALIDATE_APPS	Validate APPS schema
CREATE_GRANTS	Recreate grants and synonyms for APPS schema
MAINTAIN_MLS	Maintain multi-lingual tables
CHECK_DUAL	Check DUAL table
ENABLE_MAINT_MODE	Enable Maintenance Mode
DISABLE_MAINT_MODE	Disable Maintenance Mode

AD Administration のインタフェース

AD Administration はコマンドラインから起動します。ただし、メンテナンス・タスクはすべて AD Administration のメイン・メニューから開始されます。この項では、このユーティリティの実行に使用される共通機能の一部について説明します。

メイン・メニュー

AD Administration を起動し、プロンプトに回答すると、AD Administration のメイン・メニューが表示されます。



このメニューには、個々のメンテナンス・タスクがグループ化されているサブメニューが表示されます。サブメニューを選択するには、プロンプトでメニューの番号を入力します。AD Administration を終了するには、[Enter] キーを押します。

オプション番号

AD Administration のサブメニューに表示されるオプション名と番号は、システム構成に基づいてここに表示される内容と多少異なる場合があります。

AD Administration の対話型実行

AD Administration のメイン・メニューを表示し、サブメニューとメンテナンス・タスクにアクセスするには、この項の各ステップを完了します。

ステップ 1 環境の設定

環境を設定して、システムを定義する環境変数を適用する必要があります。このタスクは、多くの AD ユーティリティで共通です。基本ステップについては、第 1 章の「[環境の設定](#)」を参照してください。

ステップ 2 AD Administration の起動

任意のディレクトリから、次のコマンドを使用して AD Administration を起動します。

```
$ adadmin
```

ユーティリティが起動し、最初のプロンプトが表示されます。

ステップ 3 プロンプトへの応答

AD Administration プロンプトで情報を入力します。AD コマンドラインの基本プロンプトについては、第 1 章を参照してください。オプション特有のプロンプトは、この章のオプションに関する項で説明します。

プロンプトを完了すると、メイン・メニューが表示されます。

ステップ 4 メンテナンス・タスクの選択

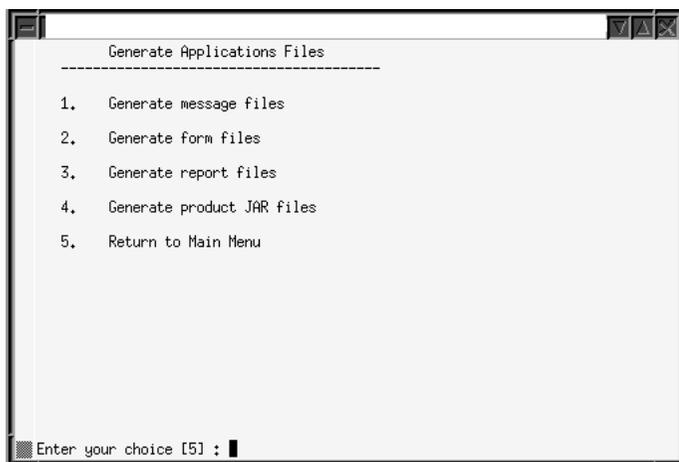
メイン・メニューから、サブメニューを選択します。表示されるサブメニューとオプションは、次の項の「[アプリケーション・ファイルの生成](#)」から順に詳しく説明します。

ステップ 5 AD Administration の終了

画面のプロンプトでオプション 6 (「Exit AD Administration」) を選択すると、メイン・メニューから AD Administration を終了できます。いずれかのプロンプトで、コマンドラインに「abort」と入力してユーティリティを終了することもできます。abort コマンドを使用した後に AD ユーティリティを再起動する方法の詳細は、第 1 章の「[再起動ファイル](#)」を参照してください。

アプリケーション・ファイルの生成

アプリケーション・ライフ・サイクル期間中にアプリケーション・ファイルを生成する必要がある場合があります。関連タスクには、「Generate Applications Files」メニューからアクセスします。



システム・ユーザーのメッセージ、フォームまたはレポートに対するアクセスに問題がある場合は、関連ファイルを生成すると、問題が解決することがあります。あるいは、製品機能を追加または変更するパッチを適用するときに、パッチ適用による停止時間中に生成ドライバを実行するかわりに、パッチの適用後に関連ファイルを生成できます。ファイルの生成タスクは、必要に応じていずれのサーバーでも実行できます。

注意： ファイルを生成するためにシステムを停止する必要はありません。ただし、生成対象のファイル（例：Human Resources フォーム）にアクセスしているユーザーはログオフする必要があります。

追加情報： 『Oracle Applications メンテナンス・プロシージャ』の「製品ファイルの生成」を参照してください。

メッセージ・ファイルの生成

Oracle Applications では、これらのファイルを使用してメッセージを表示します。このタスクは、Oracle Application Object Library の表から、メッセージ・バイナリ・ファイル（拡張子 .msb）を生成します。

注意： このタスクは、パッチの README ファイル、または Oracle サポート・サービスで指示された場合にかぎり実行してください。

Forms ファイルおよびレポート・ファイルの生成

これらのタスクの操作はほぼ同様です。

- Forms ファイルの生成

実行可能な Oracle Forms ファイル (拡張子 .fmx) をバイナリ・フォームの定義ファイル (拡張子 .fmb) から生成します。定義ファイルは \$AU_TOP の下にあり、実行可能ファイルは各製品ディレクトリの下に格納されています。

- レポート・ファイルの生成

バイナリの Oracle Reports レポート・ファイル (拡張子 .rdf) を生成します。

プロンプトおよび動作はほぼ同じですが、例外があります。

- ワーカー数を指定するプロンプトが表示され、選択された製品に対して、選択されたオブジェクトがパラレルで生成されます。
- 現行の (NLS_LANG の) キャラクタ・セットが表示され、このキャラクタ・セットでフォームまたはレポートの各オブジェクトを生成するかどうか指定するためのプロンプトが表示されます。
- Oracle Forms PL/SQL ライブラリ・ファイル、メニュー・ファイルおよび実行可能ファイルを再生成するかどうかを指定するプロンプトが表示されます (Forms ファイルのみ)。
- フォームまたはレポートの各オブジェクトと関連付ける製品を指定するプロンプトが表示されます。
- 選択した各製品に対して特定のフォームまたはレポート・オブジェクトを生成するかどうかを指定するためのプロンプトが表示されます。
- 現行のインストール済言語のセットが表示され、これらの言語でフォームまたはレポートのファイルを生成するかどうかを指定するためのプロンプトが表示されます。
- 生成するオブジェクトの全リストが作成されます。
- 生成するオブジェクトのリストが表示されます (特定のオブジェクトまたはすべてのオブジェクト)。

製品 JAR ファイルの生成

Developer テクノロジ・スタックをアップグレードする場合、または Oracle サポート・サービスから推奨された場合に Java アーカイブ (JAR) ファイルを生成します。JAR ファイルに署名が付加され (Web サーバー上にある場合)、次の処理が実行されます。

- JAVA_TOP に製品 JAR ファイルが生成され、APPL_TOP にコピーされます。
- APPL_TOP および JAVA_TOP の下にその他の Java 関連ファイルが生成されます。
- APPL_TOP および JAVA_TOP の下に Java ライブラリ (appsborg.zip と appsborg2.zip) が再作成されます。

タスクの実行時に、次のプロンプトが表示されます。

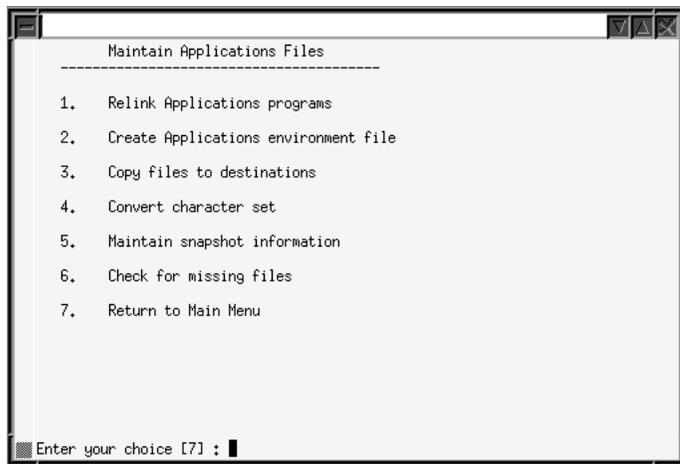
Do you wish to force generation of all jar files? [No]

「No」を選択した場合に生成される JAR ファイルは、欠落しているファイルまたは古いファイルのみです。「Yes」を選択すると、すべての JAR ファイルが生成されます。

注意: AD Administration によって、警告やエラー、および正常に生成されなかったオブジェクトのリストが表示され、正常に生成されたものとして処理を続行するかどうかを指定するプロンプトが表示された場合は、ログ・ファイルで、その問題に対処する必要があるかどうかを確認してください。処理を続行せずに後でセッションを再起動する場合は、正常に生成されなかったファイルの再生成が試行されます。

アプリケーション・ファイルのメンテナンス

アプリケーション・ファイルを最新の状態に保つには、特定のメンテナンス・タスクが必要です。たとえば、製品ファイルを中央にコピーする、または APPL_TOP 内のファイルを別のキャラクター・セットに変換する処理が必要な場合があります。これらのタスクは、「Maintain Applications Files」メニューにグループ化されています。



これらのタスクの一部は、AD Administration を実行しなくても自動的に実行されます。たとえば、AutoConfig を実行するたびに、環境ファイルが作成されます。ただし、必要に応じて、これらのタスクはこのメニューから選択して実行できます。これらのタスクは、必要に応じていずれのサーバーでも実行できます。

アプリケーション・プログラムの再リンク

Oracle Applications 実行可能プログラムを Oracle サーバー・ライブラリに再リンクして、Oracle データベースで機能するようにします。各製品ごとに、すべての実行可能プログラムをリンクするか、または特定の実行可能プログラムのみをリンクするかを選択します。

注意： デフォルトでは、デバッグ情報なしで再リンクが実行されます。デバッグ・オプションは、Oracle サポート・サービスから指示された場合にのみ使用してください。

追加情報： AD Administration では、AD 製品の実行可能プログラムはリンクできません。『Oracle Applications メンテナンス・プロシージャ』の「AD 実行可能プログラムの再リンク」を参照してください。

アプリケーション環境ファイル（レジストリ内のサブキー）の作成

システム構成を定義する環境ファイル（UNIX）または環境サブキー（Windows レジストリ）を作成します。

注意： システムがリリース 11.5.8 以上でインストールされた場合は、AutoConfig を使用できます。AD Administration によって環境ファイル名（<CONTEXT_NAME>.env）の入力を要求するプロンプトが表示され、環境ファイルが生成されます。

環境ファイルは、APPL_TOP（UNIX）または $\%HKEY_LOCAL_MACHINE\%SOFTWARE\%ORACLE\%APPLICATIONS\%12.0.0$ サブキー（Windows レジストリ）の直下に配置されます。

このファイルをカスタマイズする必要がある場合は、Oracle Applications Manager で AutoConfig を使用します。

追加情報： 『Oracle Applications 概要』の AutoConfig に関する説明を参照してください。

ファイルの宛先へのコピー

各製品領域のファイルを、アプリケーション以外のプログラムが簡単に参照できる中央にコピーします。このオプションでは改訂ベースのコピー・ロジックが使用されるため、宛先ファイルのバージョンを、ソース・ファイルのバージョンと同じかそれ以上のバージョンにすることができます。

注意： Oracle サポート・サービスから指示された場合以外は、「force」オプションを使用して既存のファイルを上書きしないでください。このオプションを指定してファイルをコピーすると、すべての JAR ファイルが更新されます。その結果、必須 JAR ファイルが JInitiator によって各クライアントに再びダウンロードされるため、実行時のパフォーマンスの劣化の原因となります。

ファイルのタイプとそれぞれの宛先を次の表に示します。

ファイル・タイプ	コピー先 (UNIX)	コピー先 (Windows)
Java ファイル	\$JAVA_TOP	%JAVA_TOP%
HTML ファイル	\$OAH_TOP	%OAH_TOP%
メディア・ファイル	\$OAM_TOP	%OAM_TOP%

変数のディレクトリは、adovars.env ファイル（UNIX）または adovars.cmd ファイル（Windows）に指定されます。

注意： このオプションを使用してレポートやグラフィックス・ファイルをコピーするときには、デフォルトの宛先は AU_TOP の下にあります。

キャラクタ・セットの変換

APPL_TOP 内のファイルを別のキャラクタ・セットに変換する準備をして、変換を実行します。

追加情報：『Oracle Applications 概要』の「国際化に関するサポート」を参照してください。

このオプションを選択すると、別のサブメニューが表示され、変換の準備としてファイルをスキャンするオプションが表示されます。スキャンによって例外（変換が不完全になる（破損する）ファイル）が検索されるため、キャラクタ・セットを実際に変換する前に、潜在的な問題を解決できます。次のいずれかのスキャン・オプションを選択します。

注意： APPL_TOP のキャラクタ・セットを変換する前に、データベース・キャラクタ・セットの互換性を検証してください。

1. 例外がないか APPL_TOP をスキャンします。

APPL_TOP をスキャンして、admin¥<SID>¥out ディレクトリに3つのファイルを作成します。

ファイル	内容
admanifest_excp.lst	変換によって壊れるため、変換されないファイルをリストします。
admanifest.lst	変換可能なファイルをリストします。
admanifest_lossy.lst	変換によって壊れるファイルを、行単位の詳細とともにリストします。

admanifest_excp.lst にリストされているファイルを確認します。キャラクタ・セットを変換する前に、変換による破損がレポートされているファイルを修正します。このタスクを admanifest_excp.lst にエントリがなくなるまで繰り返します。さらに詳細を調べる必要がある場合は、admanifest_lossy.lst を確認します。

2. 例外がないか CUSTOM ディレクトリをスキャンします。

最初のタスクと同じ情報が収集されますが、APPL_TOP ディレクトリではなくカスタム・アプリケーション・ディレクトリをスキャンします。

3. キャラクタ・セットを変換します。

このタスクは admanifest_excp.lst にエントリがない場合のみ実行してください。スキャン・オプションの実行時に作成されたマニフェスト・ファイル (admanifest.lst) の入力を要求するプロンプトが表示されます。

製品のソース・ファイルと APPL_TOP/admin のソース・ファイルがバックアップされます。製品ファイルは、<prod>_s_<char_set>.zip という形式で <PROD>_TOP ディレクトリに保存されます。admin ソース・ファイルは、admin_s_<char_set>.zip という形式で APPL_TOP/admin ディレクトリに保存されます。

スナップショット情報のメンテナンス

スナップショットには、APPL_TOP スナップショットとグローバル・スナップショットの2種類があります。APPL_TOP スナップショットには、APPL_TOP 内のファイルのパッチとバージョンがリストされます。グローバル・スナップショットには、アプリケーション・システム全体（つまり、すべての APPL_TOP 内）のファイルのパッチと最新バージョンがリストされます。

APPL_TOP スナップショットおよびグローバル・スナップショットは、現状表示スナップショットまたは名前指定表示スナップショットのいずれかです。現状表示スナップショットは、作成された後、一貫した表示を維持するために適切な時期に更新されます。一部表示スナップショットでは、現在表示から選択したファイルのみを同期化できます。名前指定表示スナップショットは、現状表示スナップショットの特定の時期のコピー（必ずしも最新の現状表示スナップショットではありません）で、更新されません。

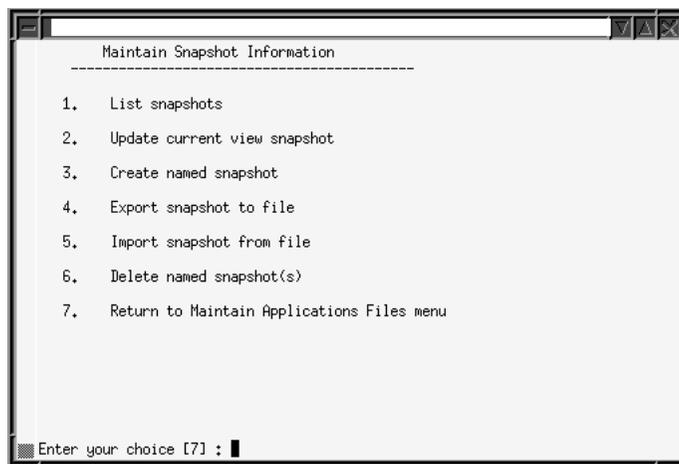
パッチ・ウィザードでは、グローバル現状表示スナップショットに含まれる情報を使用して、すでに適用されているパッチを判別します。AutoPatch は、APPL_TOP 現状表示スナップショットを使用して、すべての前提条件パッチが APPL_TOP に適用されているかどうかを判別します。スナップショット情報は、AD_SNAPSHOTS、AD_SNAPSHOT_FILES および AD_SNAPSHOT_BUGFIXES の各表に格納されます。

前提条件パッチの自動チェックの実行には、完全な現状表示スナップショットが必要です。新規インストール時に、Rapid Install によって基準となる現状スナップショットが作成されます。その後、AutoPatch を実行するたびに、情報がパッチ適用時点の最新のものになるように、新しい（更新された）スナップショットが自動的に作成されます。

スナップショット情報をメンテナンスするには、「Maintain Applications Files」メニューに移動します。

1. 「Maintain Snapshot Information」メニューにアクセスします。

「Maintain Applications Files」メニューから「Maintain Snapshot Information」を選択します。



2. オプションを選択します。

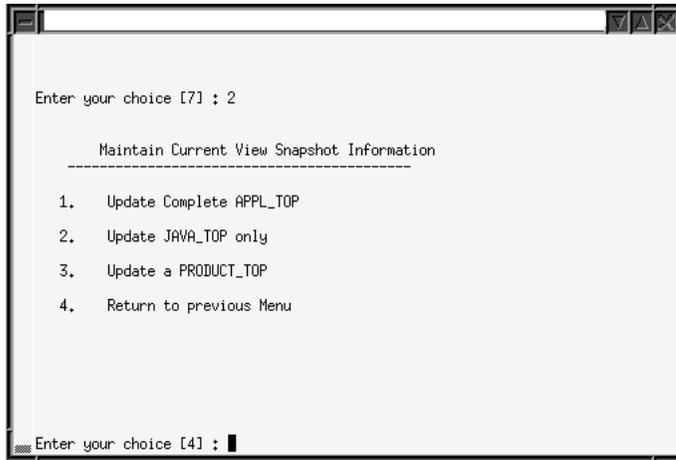
このメニューから次の操作ができます。

- (システムに格納されている) スナップショットのリスト
- 現状表示スナップショット (APPL_TOP の全部または一部およびグローバル) の更新
- 名前指定スナップショットの作成 (コピーして名前を指定する現状表示スナップショットの選択)
- スナップショットのファイルへのエクスポート (テキスト・ファイルにエクスポートするスナップショットの選択)
- (テキスト) ファイルからのスナップショットのインポート
- 名前指定スナップショットの削除 (削除対象のスナップショットの選択)

現状表示スナップショット情報のメンテナンス

現状表示スナップショットをメンテナンスする際、APPL_TOP 全体のすべてのファイルを同期化するのではなく、選択したファイルを同期化できます（一部スナップショットのメンテナンス）。このオプションは、APPL_TOP に少数のファイルのみをコピーした場合に使用します。

1. 「Maintain Snapshot Information」メニューから「Update current view snapshot」オプションを選択します。



2. 「Maintain Current View Snapshot Information」メニューから、次のいずれかのオプションを選択します。

- Update Complete APPL_TOP

これは「Update Current View Snapshot」オプションの本来の機能です。APPL_TOP 内のすべてのファイルを同期化します。

- Update JAVA_TOP only

JAVA_TOP 内のファイルのみを同期化します。プロンプトで、ファイルがコピーされた JAVA_TOP サブディレクトリへのパスを入力します。ファイルが複数のディレクトリにコピーされた場合は、[Enter] キーを押します。AD Administration によって JAVA_TOP 全体がスキャンされ、現状表示スナップショットおよびグローバル表示スナップショットの両方の情報が更新されます。

- Update a <PRODUCT>_TOP

特定の <PRODUCT>_TOP 内のファイルのみを同期化します。製品の略称を入力し、プロンプトでサブディレクトリ情報を指定します。

<PRODUCT>_TOP の単一サブディレクトリへのパスを入力します。ファイルが <PRODUCT>_TOP の複数のディレクトリにコピーされた場合は、[Enter] キーを押します。AD Administration によって <PRODUCT>_TOP 全体がスキャンされ、現状表示スナップショットおよびグローバル表示スナップショットの両方の情報が更新されます。

欠落ファイルのチェック

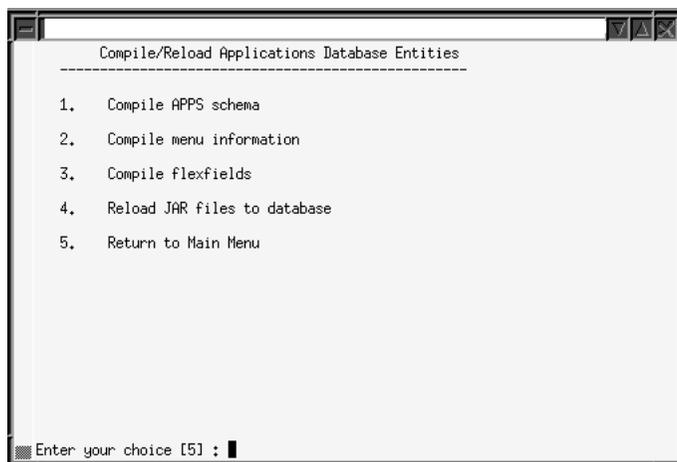
現在の構成で Oracle Applications の実行に必要なすべてのファイルが、現行の APPL_TOP に存在するかどうかを検証します。APPL_TOP に欠落しているファイルがあると考えられる場合に、このタスクを選択します。

データベース・エンティティのメンテナンス

データベース・エンティティとは、Oracle Applications に関連するデータベース内のデータベース・オブジェクトまたはデータのことです。エンティティのメンテナンス・タスクは AD Administration のメイン・メニューでは2つにグループ化されています。1つはエンティティのコンパイルまたは再ロードで、もう1つはエンティティの整合性の検証です。

データベース・エンティティのコンパイルまたは再ロード

データベース・エンティティをコンパイルまたは再ロードするには、AD Administration のメイン・メニューから「Compile/Reload Applications Database Entities」メニューを選択します。



データベース・オブジェクトのコンパイルまたは再ロードが必要なときはいつも、このメニューでタスクを実行します。たとえば、新規メニュー項目のアップロード後、またはフレックスフィールドの設定を変更するパッチの適用後などです。これらのタスクは、コア AD テクノロジー・ディレクトリ（管理サーバー）が配置されているノードでのみ実行してください。

APPS スキーマのコンパイル

パラレル・ワーカーが作成され、APPS スキーマ内の無効なデータベース・オブジェクトがコンパイルされます。

注意： このリリースでは、実行者権限を実行する関連プロンプトと同様、個別の MRC スキーマは必要でなくなりました。

追加情報： 『Oracle Applications メンテナンス・プロシージャ』の「無効なオブジェクトのコンパイル」を参照してください。

メニュー情報のコンパイル

メニュー・データ構造をコンパイルします。メニュー項目を FND_MENU_ENTRIES 表にアップロードした後、または（メニュー項目の変更後に）Menus フォームから発行された「セキュリティのコンパイル」コンカレント要求がなんらかの理由により失敗した場合にこのタスクを選択します。

すべてのメニューを強制コンパイルするかどうかを尋ねるメッセージが表示されます。デフォルト（「No」）を選択すると、変更されたメニューのみコンパイルされます。「Yes」を入力すると、すべてのメニューがコンパイルされます。通常、すべてのメニューをコンパイルすることはお勧めできません。

フレックスフィールドのコンパイル

Oracle Application Object Library (FND) 表内のフレックスフィールド・データ構造がコンパイルされます。このタスクは、フレックスフィールドの設定を変更するパッチの適用後に選択します。通常は、パッチによってこのステップの実行に適した時期が示されます。

フレックスフィールドでは、初回使用時にデータが自動的にコンパイルされるため、このタスクを実行する必要はありません。ただし、初回使用時に自動的にコンパイルするかわりに、特定の時間（例：システム使用の少ない時間）にフレックスフィールド・データをコンパイルすると、実行時パフォーマンスの潜在的な問題を軽減できます。

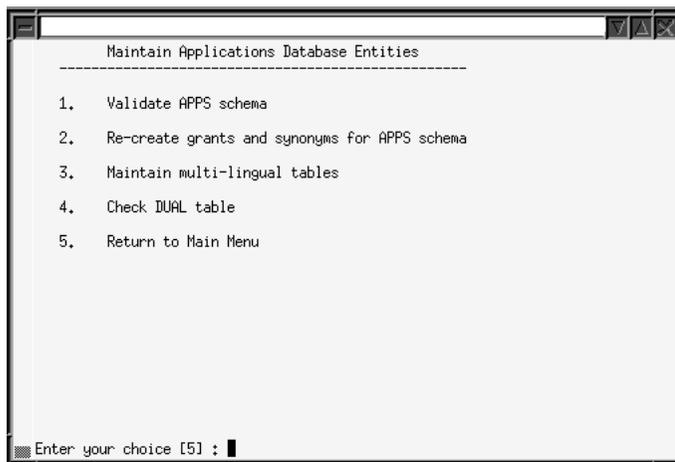
データベースへの JAR ファイルの再ロード

該当する Oracle Applications JAR ファイルがすべてデータベースに再ロードされます。このタスクは、データベースからすべての Oracle Applications Java クラスが削除された場合、たとえば、データベースの破損のために、データベースの Java 仮想マシン (JVM) が再ロードされる場合に選択します。

アプリケーション・データベース・エンティティのメンテナンス

通常のシステム使用時に、ユーザー・エラーが発生したり、大きいパッチを適用したために、データベースの整合性が損なわれる場合があります。データベース・エンティティの整合性の検証は、定期的なメンテナンス・プロシージャとして実行するか、またはシステムの動作からデータベース・エンティティが破損した可能性がある場合はすぐに実行することをお勧めします。

これらのメンテナンス・タスクを実行するには、AD Administration のメイン・メニューから「Maintain Applications Database Entities」メニュー・オプションを選択します。



このメニューの一部のタスクでは、データベース・エンティティに関する問題、または潜在的な問題がレポートされますが、その問題が実際に修復されるタスクもあります。これらのタスクは、コア AD テクノロジー・ディレクトリ（管理サーバー）が配置されているノードでのみ実行してください。

APPS スキーマの検証

APPS スキーマの整合性が検証されます。このタスクでは、<APPS schema name>.lst という名前のレポートが生成され、問題および潜在的な問題が必要な処理ごとにグループ化されてリストされます。

- 解決する必要がある（APPS スキーマに固有でない）問題
- 解決する必要がある（APPS スキーマに固有の）問題
- （APPS スキーマに固有の）対処すべき問題

このレポートは、UNIX の場合は \$APPL_TOP/admin/<SID>/out に配置されます。<SID> は ORACLE_SID または TWO_TASK 変数の値を示します。Windows の場合は %APPL_TOP%\admin\<SID>\out に配置されます。<SID> は LOCAL 変数の値を示します。ほとんどの問題は、無効なデータベース・オブジェクトをコンパイルしたり、権限付与とシノニムを再作成すると解決できます。

追加情報：『Oracle Applications メンテナンス・プロシージャ』の「権限付与およびシノニムの作成」および「無効なオブジェクトのコンパイル」を参照してください。

APPS スキーマに関して権限付与とシノニムを再作成

Oracle Applications のパブリック・スキーマ（APPLSYSUB）の権限付与およびシノニムが再作成され、一部のパッケージに対する権限付与が SYSTEM から APPS に再作成されます。さらにパラレル・ワーカーが作成されて、基本スキーマ内の順序および表を APPS スキーマにリンクする権限付与とシノニムが再作成されます。

このタスクは通常、「APPS スキーマの検証」タスクによって権限付与およびシノニムの欠落に関する問題の報告後に実行されます。

複数言語表のメンテナンス

このタスクは言語を追加した後に実行します。ワーカー数を指定するプロンプトが表示され、次にすべての複数言語表が更新されます。

DUAL 表のチェック

一部の Oracle Applications 製品では、DUAL 表にアクセスする必要があります。DUAL 表は、SYS スキーマに存在し、行を 1 行のみ含んでいる必要があります。このタスクでは、この表が存在していること、および行が 1 行であることが検証されます。

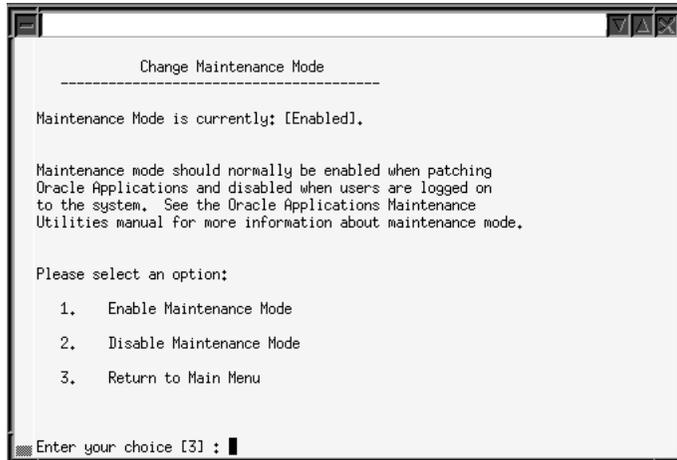
注意： DUAL 表が存在しない場合、または DUAL 表の行が 1 行でない場合、この表にアクセスする Applications 製品は異常終了します。

メンテナンス・モードの変更

メンテナンス・モードでは、ユーザー・ログオンを管理することによってシステム停止時間を制御します。メンテナンス・モードは、「Change Maintenance Mode」メニューで使用可能から使用不可に切り替えます。

追加情報：『Oracle Applications パッチ・プロシージャ』の「パッチを適用するシステムの準備」を参照してください。『Oracle Applications 概要』の「メンテナンス・モード」も参照してください。

AD Administration のメイン・メニューから「Change Maintenance Mode」を選択します。メニューが表示され、画面上部に現在のメンテナンス・モードの状態が示されます。



メンテナンス・モードを使用可能にするにはオプション 1 を選択し、使用不可にするにはオプション 2 を選択します。メンテナンス・モードは AutoPatch 実行前に使用可能にし、通常の実行時操作中は使用不可にする必要があります。

AD Relink

AD Relink を使用して AD 実行可能プログラムを Oracle サーバー製品ライブラリに再リンクし、プログラムが Oracle データベースで正しく機能し続けるようにします。製品実行可能プログラムは、AD Administration の「Maintain Applications Files」サブメニューの「Relink Applications Executables」タスクを使用してリンクできますが、このタスクで AD 実行可能プログラムを再リンクすることはできません。このため、AD 実行可能プログラムは AD Relink を使用して手動で再リンクする必要があります。複数の AD 実行可能プログラムを同時に再リンクできます。

ログ・ファイル

AD Relink を実行すると、エラーおよびメッセージを記録するログ・ファイル (adrelink.log) が作成されます。このファイルの終わりに最新の再リンク処理の情報が追加されます。このファイルは APPL_TOP/admin/log に配置されます。AD Relink の使用中にエラーが発生した場合、または再リンクが正常終了したかどうか不明な場合は、このファイルを確認して、解決する必要がある問題を調べます。

注意： AD Administration または AutoPatch セッション時に発生した再リンク・エラーは、これらのユーティリティのメイン・ログ・ファイルに記録されます。第 1 章の「ログ・ファイル」を参照してください。

この情報が必要ない場合は、adrelink.log ファイルを削除して、ディスク領域をリカバリすることもできます。AD Relink を実行するたびに新しいログ・ファイルが作成されます。

コマンドライン引数

次の表のコマンドライン引数を使用して、AD Relink の操作を変更または調整できます。これらは、このユーティリティ固有で使用することを意図しています。

force	説明
目的	再リンクする実行可能プログラムを示します。この引数は必須です。
値	「n」を指定すると、ライブラリまたはオブジェクト・ファイルが現行の実行可能プログラムより新しい場合にのみ再リンクされます。 「y」を指定すると、ライブラリまたはオブジェクト・ファイルの状態に関係なく、再リンクが実行されます。
デフォルト	なし（「y」または「n」を入力する必要があります）。
例	adrelink force=n

backup_mode	説明
目的	実行可能プログラムをバックアップするかどうかを示します。
値	「none」を指定すると、実行可能プログラムはバックアップされません。 「all」を指定すると、すべての実行可能プログラムがバックアップされます。 「file」を指定すると、adlinkbk.txt 内の指定に従ってファイルがバックアップされます。
デフォルト	backup_mode=file
例	adrelink force=n backup_mode=all

Oracle Applications を実行する際に必要なファイルは、adlinkbk.txt ファイルにリストされます。このファイルは APPL_TOP/admin にあります。backup_mode=file 引数を使用すると、これらのファイルのみをバックアップするように AD Relink に指示されます。

AD Relink のインタフェース

AD Relink はコマンドラインから実行します。メニューや入力画面は使用しません。

AD Relink の実行

AD Relink を実行する手順は、次のとおりです。

1. 環境を設定します。

システムを定義する構成パラメータの位置を示すために、環境を設定する必要があります。このタスクは、多くの AD ユーティリティで共通です。第 1 章の「[環境の設定](#)」を参照してください。

2. ファイルを再リンクします。

次のコマンドを使用して AD Relink を実行します。

UNIX:

```
S adrelink.sh force=n "ad <executable name>"
```

Windows:

```
C:¥> sh adrelink.sh force=n "ad <executable name>"
```

追加情報: 様々なコマンドライン引数を指定してこのユーティリティを実行する方法の詳細は、『Oracle Applications メンテナンス・プロシージャ』の「AD 実行可能プログラムの再リンク」を参照してください。

この章では、システムに適用済のパッチ、メンテナンス・セッションの統計とその実行時間、およびその他の重要なシステム情報が含まれる、システムの様々なレポートとビューについて説明します。この章には次の項があります。

- [Oracle Applications のレポート・ツール](#)
- [AD Job Timing Report](#)
- [AD Configuration Report](#)
- [AD File Identification Report](#)
- [AD Check Digest](#)

Oracle Applications のレポート・ツール

Oracle Applications を使用する際には、システムを変更および拡張するメンテナンス・タスクを実行します。Oracle Applications には、システム・ステータスに関する多数のレポートが用意されています。たとえば、ファイルのバージョンおよび翻訳レベルに関するレポートを生成できます。また、完了したメンテナンス・セッションの数、各セッションのジョブ数、およびセッションと各ジョブの実行時間に関する統計が含まれたレポートを生成することもできます。

Oracle Applications のレポート機能の多くは、パッチに関係があります。これらのレポートの詳細は、『Oracle Applications パッチ・プロシージャ』を参照してください。

レポート・ツール

次の AD ユーティリティはコマンドラインから実行します。

AD Job Timing Report

AutoPatch および AD Administration によって自動的に生成され、時間がかかる処理を報告します。このレポートをコマンドラインから手動で実行して、AD ユーティリティ・セッションに関する要約情報を表示できます。

AD Configuration Report

このレポートには、Oracle Applications をインストールした構成に関する情報として、製品グループ情報、複数組織または MRC 機能がインストールされているかどうか、ベース言語および他にインストールされた言語などが表示されます。

AD File Identification Report

このレポートでは、Oracle Applications ファイルのバージョンおよび翻訳レベルを識別します。

AD Job Timing Report

AutoPatch または AD Administration を実行すると、AD Job Timing Report (adt<session_id>.lst) が自動的に生成されます。このレポートには、パラレル処理セッションの完了に要した時間が表示され、セッション中にワーカーがジョブを処理する際に実行した処理の情報が提供されます。また、このレポートには、セッション全体、セッション内のフェーズ (AD Administration ではフェーズごとにジョブをグループ化しません)、および個別のジョブに関するタイミング統計も含まれます。

AutoPatch または AD Administration のセッション中はいつでも、現行セッションの進捗状況を表示する AD Job Timing Report を作成するスクリプトを実行できます。または、APPL_TOP/admin/<SID>/out ディレクトリに移動して、前のセッションの adt<session_id>.lst レポートを表示できます。

注意： AutoPatch および AD Administration のセッションでは、adt<session_id>.lst レポートは、Oracle Applications Manager でアクセスする Web ベースのタイミング・レポートによく似ています。『Oracle Applications パッチ・プロシージャ』の「タイミング・レポート」を参照してください。

AD Job Timing Report のインタフェース

Oracle Applications Manager の「Timing Reports」ページからジョブ・タイミング統計を確認できます。コマンドラインから AD Administration ジョブの AD Job Timing Report を実行することもできます。メニューや入力画面はありません。必要なパラメータは直接コマンドラインに入力します。

AD Job Timing Report の実行

これらのコマンドの <output file> には、拡張子を指定しないでください。adtimrpt.sql スクリプトによって、タイミング・レポート用の .lst ファイルと .csv ファイル（現在は使用されていません）の 2 つのファイルが作成されます。タイミング・レポートの名前は adt<session_id>.lst で、\$APPL_TOP/admin/<SID>/out (UNIX) または %APPL_TOP%\admin\<SID>\out (Windows) にあります。

ステップ 1 環境の設定

システムを定義する環境変数を適用するために、環境を設定します。このタスクは、多くの AD ユーティリティで共通です。基本的なステップは、第 1 章の「環境の設定」を参照してください。

ステップ 2 AD Job Timing Report の実行

次のコマンドを使用してレポートを実行します。<session_id> は表示するタイミング統計のセッションで、<output file> は統計が書き込まれるファイルの名前です。

UNIX:

```
$ cd $APPL_TOP/admin/<SID>/out
$ sqlplus <APPS username>/<APPS password> @$AD_TOP/admin/sql/adtimrpt.sql ¥
<session id> <output file>
```

Windows:

```
C:¥> cd %APPL_TOP%\admin\<SID>\out
C:¥> sqlplus <APPS username>/<APPS password> @%AD_TOP%\admin\sql\adtimrpt.sql ¥
<session id> <output file>
```

AD Configuration Report

AD Configuration ユーティリティは、Oracle Applications がインストールされた構成に関する標準情報を報告する SQL スクリプトです。インストールのステータスをデバッグまたはドキュメント化するために実行します。AD Configuration を実行すると、次の項目が含まれたレポート・ファイル (adutconf.lst) が生成されます。

- SQL*Plus PAUSE と NEWPAGE の設定
- ロールバック・セグメント情報
- 製品グループに関する情報
- 複数組織がインストール済かどうか、および営業単位のリスト
- 複数報告通貨 (MRC) 機能がインストールされているかどうか
- 登録済みの製品のリスト
- 登録済みの全スキーマの情報
- 共有製品と従属製品を含むインストールされた全製品の情報
- ローカライゼーション・モジュールのステータス
- ベース言語と他にインストールされた言語
- NLS init.ora 設定

AD Configuration Report のインタフェース

AD Configuration はコマンドラインから実行し、必要な情報を表示します。メニューや入力画面はありません。

AD Configuration の実行

このユーティリティを実行する手順は、次のとおりです。

ステップ1 環境の設定

環境を設定して、システムを定義する環境変数を適用する必要があります。このタスクは、多くの AD ユーティリティで共通です。基本的なステップは、第 1 章の「環境の設定」を参照してください。

ステップ2 AD Configuration Report の実行

次のコマンドを使用します。レポート出力ファイルは、現行の作業ディレクトリ内の adutconf.lst に書き込まれます。

UNIX:

```
$ cd $APPL_TOP/admin/<SID>/out
$ sqlplus <APPS schema username>/<APPS schema password> ¥
  @<AD_TOP>/sql/adutconf.sql
```

Windows:

```
C:¥> cd %APPL_TOP%\admin¥<SID>¥out
C:¥> sqlplus <APPS schema username>/<APPS schema password> ¥
  @%AD_TOP%\sql¥adutconf.sql
```

AD File Identification Report

AD File Identification ユーティリティでは、Oracle Applications ファイルのバージョンおよび翻訳レベルを識別するレポートを作成します。Oracle サポート・サービスに提供するサイトの情報を収集する場合に便利です。

コマンドライン引数

コマンドラインでファイル名の番号を引数として指定することもできます。<file n> 引数は、アプリケーション・テキスト・ファイル、バイナリ・オブジェクト・ファイル（UNIX では拡張子 .o、Windows では拡張子 .obj）、ライブラリ・ファイル（UNIX では拡張子 .a、Windows では拡張子 .lib）、ダイナミック・リンク・ライブラリ（Windows では拡張子 .dll）または実行可能プログラム（Windows では拡張子 .exe）の名前でなければなりません。

adident にライブラリ・ファイルまたは実行可能ファイルの名前を指定すると、ライブラリまたは実行可能ファイルとそれぞれのバージョンを構成するすべてのファイルが表示されます。次に例を示します。

UNIX:

```
$ adident Header $FND_TOP/lib/wfload.o $FND_TOP/lib/libfnd.a

wfload.o:
  wfload.oc          115.5.1100.3
libfnd.a:
  fdacon.lc          115.0
  fdatat.lc           115.0
  fdastr.lc           115.0
  fdaupd.lc           115.0.1100.2
  fdahmi.lc           115.0.1100.2
  fdacv.lc            115.0
  dfutl.lc            115.4
  ....
```

Windows:

```
C:¥> adident Header %FND_TOP%¥lib¥wload.obj %FND_TOP%¥lib¥fndst.lib
```

```
wload.obj:
wload.oc          115.5.1100.3
fndst.lib:
fdacon.lc         115.0
fdatat.lc         115.0
fdastr.lc         115.0
fdaupd.lc         115.0.1100.2
fdahmi.lc         115.0.1100.2
fdacv.lc          115.0
fdfutl.lc         115.4
....
```

アスタリスク (*) を使用して、ディレクトリ内のすべてのファイルを識別することもできます (たとえば、すべての SQL スクリプトを識別するには *.sql と指定します)。

AD File Identification Report のインタフェース

AD File Identification はコマンドラインから実行し、必要な情報を表示します。メニューや入力画面はありません。

AD File Identification の実行

このユーティリティを実行する手順は、次のとおりです。

ステップ1 環境の設定

環境を設定して、システムを定義する環境変数を適用する必要があります。このタスクは、多くの AD ユーティリティで共通です。基本的なステップは、[第 1 章の「環境の設定」](#)を参照してください。

ステップ2 AD File Identification の実行

次のコマンドを使用します。出力は画面に表示されます。

UNIX:

```
$ adident Header <file 1> [ <file 2> <file 3> ... ]
```

Windows:

```
C:¥> adident Header <file 1> [ <file 2> <file 3> ... ]
```

AD Check Digest

AD Check Digest ユーティリティでは、ダウンロードしたパッチの整合性をチェックします。Oracle Applications パッチごとに、MD5 および SHA-1 ダイジェストが提供されます。MD5 ダイジェストはパッチを一意的に識別する 128 ビットの文字列で、SHA-1 は 160 ビットの文字列です。各パッチのパッチ・ダイジェストは OracleMetaLink のダウンロード・ページから表示できます。AD Check Digest を使用して、ダウンロードしたパッチに対して計算されたダイジェストが OracleMetaLink で発行されたダイジェストと一致しているかどうかを検証します。

AD Check Digest インタフェース

AD Check Digest を実行して、必要な情報をコマンドラインから入力します。メニューや入力画面はありません。

パラメータ

AD Check Digest を実行するために、次のパラメータを使用します。

パラメータ	定義
-file	パッチのパスおよびファイル名。このパラメータは必須です。-md5 および -sha1 パラメータを使用せずに -file パラメータを使用する場合、AD Check Digest でパッチの MD5 および SHA-1 ダイジェストが計算されます。
-md5	OracleMetaLink のパッチ・ダウンロード・ページからの MD5 出力。-md5 パラメータを使用する場合、AD Check Digest でパッチ・ファイルに対して計算された MD5 ダイジェストとユーザーが入力した MD5 値が比較されます。
-sha1	OracleMetaLink のパッチ・ダウンロード・ページからの SHA-1 出力。-sha1 パラメータを使用する場合、AD Check Digest でパッチ・ファイルに対して計算された SHA-1 ダイジェストとユーザーが入力した SHA-1 値が比較されます。

AD Check Digest の実行

このユーティリティを実行する手順は、次のとおりです。

ステップ 1 環境の設定

環境を設定して、システムを定義する環境変数を適用する必要があります。このタスクは、多くの AD ユーティリティで共通です。基本的なステップは、第 1 章の「[環境の設定](#)」を参照してください。

ステップ 2 AD Check Digest の実行

次のコマンドを使用します。出力は画面に表示されます。

UNIX:

```
$ adchkdig -file <File> [ -md5 <MD5_digest> -sha1 <SHA-1_digest> ]
```

Windows:

```
C:¥> adchkdig -file <File> [ -md5 <MD5_digest> -sha1 <SHA-1_digest> ]
```

A

AD Administration

adadmin, 4-5

「Change Maintenance Mode」メニュー, 4-16

「Compile/Reload Applications Database Entities」メニュー, 4-13

「Generate Applications Files」メニュー, 4-6

「Maintain Applications Database Entities」メニュー, 4-14

「Maintain Applications Files」サブメニュー, 4-8

「Maintain Snapshot Information」メニュー, 4-11

概要, 4-2

起動する, 4-5

スナップショットのメンテナンス, 4-11

非対話型操作のメニュー・オプション, 4-3

非対話型で実行する, 4-3

プロンプト, 4-2

メイン・メニュー, 4-4

AD Check Digest, 5-6

AD Configuration

adutconf.sql, 5-3

概要, 5-3

AD Controller

概要, 1-20

起動する, 1-20

非対話型で実行する, 1-21

AD File Identification, 5-4

AD Job Timing Report

adtimrpt.sql, 5-3

概要, 5-2

実行する, 5-3

AD Relink

adrelink.sh, 4-18

概要, 4-17

コマンドライン引数

 backup_mode, 4-17

 force, 4-17

実行する, 4-18

ログ・ファイル, 4-17

AD Splicer, 3-3

adsplICE, 3-4

newprods.txt, 3-3

実行する, 3-4

制御ファイル, 3-3

製品定義ファイル, 3-3

adadmin, 1-2, 4-5

adaimgr, 1-3

adchkdig, 1-2, 5-6

adconfig.txt, 1-8

adctrl, 1-2, 1-20

adident, 1-2, 5-4

admrgpch, 1-2

adncnv, 1-2, 3-5

adovars.cmd, 1-8

adovars.env, 1-8

adpatch, 1-2

adrelink.sh, 1-2, 4-18

adsplICE, 1-2, 3-4

adtimrpt.sql, 1-2, 5-3

adutconf.sql, 1-2, 5-3

AD ユーティリティ

 AD Administration, 4-2

 AD Check Digest, 5-6

 AD Configuration, 5-3

 AD Controller, 1-20

 AD File Identification, 5-4

 AD Splicer, 3-3

 AutoPatch, 2-8

 flags, 1-14

 一時ディスク領域, 1-16

 環境ファイル, 1-8

 起動する, 1-16

 機能バージョン, 1-9

 キャラクタ・セット変換, 3-5

 共通の操作, 1-6

 構成ファイル, 1-8

 コマンドライン引数, 1-10

 再起動する, 1-17

 再起動ファイル, 1-7

 実行する, 1-15

 対話型処理, 1-6

 停止する, 1-17

 パラレル処理, 1-18

 非対話型処理, 1-6

 プロンプト, 1-6

 ログ・ファイル, 1-7

APPL_TOP

 欠落ファイル, 4-12

 スナップショット, 4-11

applora.txt, 1-9

applorau.txt, 1-9

applprod.txt, 1-9

appltErr.txt, 1-9

A

- AD Administration で検証する, 4-15
- AD Administration でコンパイルする, 4-13
- AutoPatch
 - 概要, 2-8

C

- CONTEXT_NAME, 1-8

D

- DUAL 表
 - 検証する, 4-15

E

- envshell.cmd, 1-15

F

- File Character Set Converter
 - adncnv, 3-5
 - 概要, 3-5
 - 実行する, 3-5
- FND_INSTALL_PROCESSES 表, 1-17
- FND_MENU_ENTRIES 表, 4-13
- fnenv.env, 1-9

J

- JAR ファイル
 - 再ロード, 4-14
 - 生成する, 4-7

N

- newprods.txt, 3-3

O

- OAM, 「Oracle Applications Manager」を参照
- Oracle Application Object Library (AOL)
 - 表内のフレックスフィールドをコンパイルする, 4-14
- Oracle Applications
 - メンテナンスする, 4-2
- Oracle Applications Manager (OAM)
 - Applications Dashboard, 1-23
 - help, 1-5
 - Site Map, 1-5
 - 概要, 1-3
 - 共通の操作, 1-23
 - メンテナンス・ユーティリティへのアクセス, 1-25

R

- Rapid Install
 - 実行する, 2-6

W

- Web ベース・ユーティリティ, 1-23
- Windows サービス
 - 構成する, 1-16

あ

- アプリケーション層ファイル・システム
 - 共有, 1-18
- アプリケーション・ファイル
 - 生成する, 4-6
 - メンテナンスする, 4-8

お

- オンライン・ヘルプ
 - OAM ヘルプ, 1-5
 - コマンドライン, 1-4

か

- 環境
 - 設定する, 1-15
- 環境ファイル, 1-8
 - adovars.cmd, 1-8
 - adovars.env, 1-8
 - fnenv.env, 1-9
 - 作成する, 4-9

き

- キャラクタ・セット
 - 変換する, 3-5, 4-10

け

- 権限付与とシノニム
 - 再作成する, 4-15

こ

- 構成ファイル, 1-8
 - adconfig.txt, 1-8
 - applora.txt, 1-9
 - applorau.txt, 1-9
 - applprod.txt, 1-9
 - appltterr.txt, 1-9
- コマンドライン引数
 - AD ユーティリティ
 - abandon, 1-11
 - defaultsfile, 1-11
 - flags=logging, 1-14
 - flags=nohidepw, 1-14
 - flags=trace, 1-14
 - help, 1-11
 - interactive, 1-11
 - logfile, 1-12
 - printdebug, 1-13
 - restart, 1-13
 - wait_on_failed_job, 1-13

さ

サーバー・ライブラリ
実行可能プログラムに再リンクする, 4-8
再起動ファイル, 1-7

し

システム・メンテナンス, 4-2
実行可能プログラム
再リンク, 4-8
シノニム
AD Administration で再作成する, 4-15

す

スナップショット
グローバル, 4-11
現状表示, 4-11
作成する, 4-11
名前指定表示, 4-11
メンテナンスする, 4-11

せ

製品
オフサイクル
概要, 3-3
登録する, 3-3
spray 化する, 3-3

て

データベース・エンティティ
コンパイルする, 4-13
再ロード, 4-13
メンテナンスする, 4-14

は

パラレル処理
概要, 1-18
複数ノードへの分散, 1-22

ふ

ファイル
JAR ファイルを生成する, 4-7
コピー (宛先へ), 4-9
メッセージ・ファイルを生成する, 4-6
複数言語表
メンテナンスする, 4-15
フレックスフィールド・データ
コンパイルする, 4-14
分散 AD, 1-18

め

メッセージ・ファイル
生成する, 4-6
メニュー情報
コンパイルする, 4-13
メニュー・データ構造
コンパイルする, 4-13
メンテナンス・モード
使用可能にする, 4-16
使用不可にする, 4-16

ゆ

ユーティリティ
AD, 1-2
Web ベース, 1-3
コマンドライン, 1-2

ろ

ログ・ファイル
概要, 1-7

わ

ワーカー
子プロセス, 1-19
ログ・ファイル, 1-19

